

---

**真・恋姫無双**

**二度目の人生も波瀾万丈**

頭隠して尻も隠す

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真・恋姫無双

二度目の人生も波瀾万丈

### 【Nコード】

N5136Y

### 【作者名】

頭隠して尻も隠す

### 【あらすじ】

ハンター×ハンターの世界でキメラアントに討伐に参加させられた主人公。最後には後ろから刺されて死亡してしまう。でも、気が付いたら今度は別の世界に転生。今度こそ穏やかに暮らそうと思っても、それは叶わなかった。激動の時代に生まれた主人公は一体どうなるのか？

## 第一話 二度目の人生（前書き）

一応パワーバランスは考えています。H×Hの腕力最強がウボオーだとするなら、恋姫の世界では呂布となります。キルアでさえ16トンの腕力があるので念を使うととんでもない事になってしまいあれなので、恋姫の世界に合わせたいと思います。それでも無理が出てくると思うのでご了承ください。明らかに不自然なところがあるかもしれませんが気にしないとゆう方は読んでみてください

## 第一話 二度目の人生

自分の意識が覚醒してくる。此処どこ？ …あたりを見渡そうとするが首が動かない、オレは一体…

「おい、泣いてくれ！息子よ」

誰かが叫んでいる。とりあえず、話を聞いてみる事にする。此処がどこだかくらいわかるだろう。

……あれ？声が出ない。もう一度 やはりでない。もう自棄だ怒鳴るぐらいのつもりで

「おぎゃあああ、おぎゃあああ、あああ（えゝなんで泣き声！？）」

「おおよつやく泣いたぞ、良くやったな紫苑！元気な男の子だ。」

「はい、あなた。名前はもう決めているのかしら？」

「ああ！性は黄、名を恩、字は子苑、真名を璃人と名付けようと思っ。どうだろうか？」

「字に私の真名が入っているわね。それに男の子だったら璃人、女の子だったら璃々、そう決めてましたもんね。私は良いと思います」

「それは良かった。よし、今日からお前は黄恩子苑こうおんしえん、真名は璃人りびとだ。元気に育てよ」そう言ってオレの事持ち上げるおじさん。

「あうあうあああうああ（オレの名前違うんですけど）」言葉にならない。なんで？

「ハツハハ、気に入ったか？そんなに大きな声で泣くとは」

なんかおじさんに抱っこされているんだけど、オレってそんなに小さくないんだけど……あれ？やったら手が小さいんだけど……少し首が動かせるようになったから自分の体を見える……あれ？おかしいな？……うそ!？

「あうあううううああ!……（オレの体縮んでるんですけど!……!）」

「もう、あなた、そこまでにしてください!璃人も泣いてるでしょ

う

「おおつとすまないな、ついうれしくて」

「ホントしょうがない人ですね。さ、璃人お母さんと一緒にお寝んねしましょうね」なんか・お姉さんが言っているが、正直聞こえてこない。自分の現状に精一杯だからだ。だけど、体は眠くなる、ああ、起きた時には元に戻っていますように

そう言っ意識がおちて行った。

-----

自分の新しい名前を授かってから5年。第二の人生にも慣れてきた。

第二の人生と言っているが実はオレはもともとは違う世界で暮らしていた。クルタという一族に生まれ、旅をしながら暮らしていたが、8歳のころ幻影旅団という集団に襲われ一族は二人を残して全滅。オレとも一人の少年、クラピカはは小さかったこともあり、大人たちに助けられなんとか生き残った。その後クラピカと行動を共にしようとも思ったが、あいつは復讐にとらわれ過ぎていて、相容れないとわかった。オレは盗まれた一族の緋の目を探す事にした。緋の目はクルター族にしかない特殊な目で世界で最も美し物の1つに数

えられる。だからオレにはハンターになることを決めた。その世界では一種の何でも屋、ハンターという仕事がある。ハンターになるには試験に合格しなければならぬが、16歳でなんとかハンターになれて、その後念を学び数年の修行。戦闘力も付いたので本格的に緋の目を探すことにした。一応ほとんどの緋の目は集められたのだが、途中キメラアントというやつらが、国を攻めてきた時にオレもハンターとして討伐に参加させられた。

その討伐の最中にゴンとキルアにも会い意気投合。すぐに仲良くなれた。話しているとクラピカの知り合いらしく驚いたが、クラピカが旅団を殺したという事を聞いてなんとも言えない感じがした。旅団を殺すことは別に気にしないがあいつがその事に耐えられないだろうと思った。復讐にとらわれていたが、あいつはもともと優しいやつだから、人を殺した後、後悔に苛まれるのだろう。クルタの皆はそんな事望んでいなかっただろうに

キメラアントの討伐はなかなか辛い。元来臆病なので戦闘する際はほとんど逃げていたが、いったん緋の目が発動すると好戦的になり戦ってしまう。王討伐の際には戦闘力のせいもあって強制的に参加させられたが、親衛隊のやつらが強い。何とか退けられたが今度はゴンが暴走。どうやら、自分の大切な人が殺され操られているのを見て治してもらおうとしたが、それは叶わず、悔しさからオーラを極限まで出し暴走。ゴンとキルアの師であるピスケが言っていたが、ゴンは善悪に頓着がないためどちらにも染まり易いということだ。今ゴンは自分の無力さと後悔から闇に染まった。キルアと共にゴンを抑えようとするがとまらない。キルアも友達を攻撃できないらしく、オレが全力で行くしかない。

緋の目を発動し能力を最大限發揮なんとか互角にやり合うも体力が限界に来る。仕方なく捨て身で攻撃しなんとかゴンの正気を取り戻す事に成功。だが、その後、後ろから来ていた親衛隊のやつらに後ろから刺されそのまま息を引き取った。最後にゴンとキルアに気にするなと言えたのが良かったな。

それで死んだと思ったらなぜか赤ん坊の状態で生まれ変わり、しかも、名前が黄子苑となってしまった。しかも、この世界には真名とというのがあらずしく、とても神聖な名前で勝手に呼んだら殺されてもおかしくないらしい。

現状把握は終わった。けど今の自分には一つ問題がある。

そう、なぜか、緋の目が発動する。肉体はクルタ族の肉体ではないのに、昔の感覚でやってみたらできてしまった。オレとしてはこれはあまり嬉しくない。なぜなら、この益州と呼ばれる地域では、赤目は不幸を呼ぶとされている。そんなもん迷信だろうと自分で思っ  
ていても周りはそうはいかない。その話を聞いてから人前で緋の目を発動することはなくなった。これがバレて処刑にでもなったら目も当てられない。バレないように周りを気にしながら生きるのはいさぐく疲れる。だけど、生きるためには仕方がない。

名前が変わってから12年が経った。今でもなんとか目の事はバレずに暮せていたが、最近ちよつと危ない。昔発動した時に見ていた人がいたらしく噂になりつつある。今日もここに来る前に軽蔑な目で見られた。だから、城や街にいるのは居づらく、最近はこの森で鍛錬に勤しんでいる。やはりこの世界でも争いがあるらしく、物騒な世界らしい。元いた世界に比べれば、銃器がない分こちらの方が楽だが、治安があまり良くないため、各村が盗賊に襲われるなんて言うのがざらだ。基本的に自分が臆病な事は自覚しているので、逃げればいいのだが、逃げられないようになった時、戦える事に越したことはないので鍛えようと思っている。だから今オレは近くの森に来て基礎訓練を行っている

「ハア、ハア、ハア」ゴンとキルアとクジラ島に行った時、あの二人の身体能力には驚いた。キルアの方は御家柄のせいと言うものもあるが、ゴンは完全な天然ものなのだ。筋力はキルアの家で鍛えたいらしいのだが、それ以外はほぼ森の中の生活で身に付いたらしい。キルアの話ではハンター試験で無自覚で絶を使っていたほど、気配を消せるらしい。ほぼ動物ではないだろうか？と思っても仕方がないだろう。

だから、今森の中で修行している。森の中をかけずり回るだけでも相当な訓練になる。地面は整地されてないためデコボコでその上を走るのだからなかなか辛い。前の体ならどうと言う事もないが、今

の体では息が切れる。2時間ほど走ったら限界が来た。

「フゝ、やっぱここら辺が限界かな。念の修行ももう少しやりたいけど基礎体力がなきゃ話にならないからな」近くの川で顔を洗い少し休憩する

「でも、やっぱゴンはすげえな。今くらいの歳にはもう森を知り尽くしていたんだもんな。それに野生動物とも仲良かったっぽいし、すげえな。オレなんか熊見た時なんて速攻で逃げだしたもんな。いやゝあの時はマジで危なかった、昔の体と違って頑丈じゃないから追いつかれたら死ぬとこだった。やっぱ念はできると便利だな。絶ができる体力回復に役立つし、動物からだって逃げれる」

精孔を閉じてオーラを消す。この状態でいれば体力回復も早いだろう。肉体は違えど感覚は同じなので、オーラ量はまだまだだがそれなりに念が使える

「一度やっているから問題ないな。体の経験は残っていないが感覚の経験は残っているようだ。これなら問題ないけど…今のオレの系統って何だろうか？まあそれに関してはもう少し錬ができるようになってからだな。それに暗くなってきたしそろそろ帰るか」

自分の系統に興味を抱きながらも、追々やっていけば良いだろうと思いつつ思い城に戻るのだった

.....  
城に到着。なぜ城かと言うと家の母上が劉璋という武将の部下で一つの城を任されている。この世界では男性よりも女性の方が強いらしく城主は父上ではなく母上である。

しかし、今は母上は妊娠中、だから、代理として父上が城主をしている。父上は文官なので強くはないが書類整理が早く文官として優秀だ

「父上ただいま戻りました。」

「おお、璃人か、紫苑が心配するからあまり遠くに行くでないぞ。」

「すみません。すこし森に行ってみたくて。……母上の方は大丈夫なのですか？」

「ああ、もう少しで生まれそうだと、医者が出ておった。お前にとっては初めての弟か妹になるな。兄としてしっかりしろよ。……」

それと、お前の目の事なんだが・・・」父上が辛そうに言う

「はい」

「どうやら最近噂になっていてな、お前は昔から隠しているのだが、最近盗賊とか、天災とか多いだろ？そのせいでお前の目の事を知っているやつが色々言っただけで来てな……」

「はい……。街に降りた時もやはり変な目で見られました。さすがに武力行使はされてませんが」「最近はいつもの事である。奇異の目や何か憎しみを持った目で見られる事もある。大人が3人くらい来た時は本気で逃げた。ホント怖かった」

「すまないな。お前のせいじゃないのだが、私をもっとしっかりしていれば・・・」父上の後悔した顔が止まらない。父上や母上が悪いわけではないし、自分自身なぜ緋の目を持って生まれ変わったのかも謎である。

「いえ、父上が悪いわけではありませんので。それでは失礼します。母上の様子も見ておきたいので」

「ああ、紫苑も会いたがっていただけだからな。言って来い。ゴホ、ゴホ」咳の仕方が変わったが、気のせいだと思えば父上に話しかける

「大丈夫ですか？父上も政務で忙しいでしょうから、体調には気を付けてください」

「ああ、大丈夫だ。お前にも手伝ってもらっているし、だいぶ楽にはなったんだ。風邪だろうから気にするな。それより早く紫苑のもとに行つてやれ」

そう言われて、なら大丈夫かなと思ひ部屋を出る。昔なら気づいただろうが、何ぶんこの世界に来てからなまってしまっているので父親の微妙な違いに気づかなかつた。気づいていれば変わったかもしれない。咳した父の手に血が付いている事に気づけば

母上の部屋に向かう途中色々な視線を向けられた。オレの事をわかつてくれる人は憐れみを、わからない人は蔑みの目で見られる。思う事は色々あるがそれをしてしまつては父上達に迷惑がかかる。そこは抑えて母上のもとに向かつた。

コンコン

「母上、失礼してもよろしいですか？」

「あら、璃人帰つて来たの？入つて良いわよ」母上の明るい声が聞

こえた。体調は良さそうだ

「失礼します。」

「そんなに畏まらないで良いわよ、親子なんだから」

「はい。 … 体は大丈夫ですか？」

「ええ、陣痛もそこまでひどいものではないし、それにあなたで一度経験してるから、問題ないわ」

「・・・お手数をかけます」自分の生まれた頃を思い出してちょっとだけ恥ずかしくなる。あの頃の記憶はさっさと消したいものである

「可笑しな子ね、子供が親に迷惑を掛けるなんて当然のことよ。ましてや、赤ん坊のころなんてみんなそうなのよ。この子も早く出たってわがまま言ってるわ。」

「ハハ、言葉がわかるんですか？他になんて言ってるんですか？私の弟か妹は」

「そうね、お兄ちゃん遊んでかしら？璃人もお兄さんになるのだから」

らしっかりしないよね。妹を守るのはお兄ちゃんの役目よ」

「それ父上にも言われました。…というか、妹なんですか？」

「ただの勘よ。なんとなくそついう気がするの、この子は女の子だつて。」

「すごいですね、エスパーですか？」

「えすぱー？」

「あ、気になさらないください。それより名前は決めてあるので  
すか？」

「璃人は時々変な事言つわよね。」

名前なら決めて

あるわ。性を黄、名を絛、真名を璃々にしようと思つたの。どうかし  
らっ..」

「璃々ですか、オレと同じ字が入っていますね」

「ええ、あなたが生まれる前にあの人と決めていたのよ。男の子だ  
つたら璃人、女の子だつたら璃々って」

「これで弟が生まれてきたら大変ですね」

「大丈夫よ私の勤は結構当たるから。それにたとえ男の子が生まれてきたとしても私たちの家族ですもの、大切に育てるわ」

「母親の鑑です事」

「あら、家族と言ったでしょ？あなただって大切にしているわ。ちよつと私達に堅苦しいのがあれだけど」

「なぜか、こつなつてしまつんですよ。直そつと思つてはいるんですけどなかなか」

「まあ12歳でそこまではつきりと話せてるほつが可笑しいのだけどね。息子が優秀というのも困りものだわ」

「不幸を呼ぶつて言われてるんですけどね…」ちよつと顔を引きつらせながら言つ

「璃人、あなたの目のことは申し訳ないと思っっているわ。でもね璃人、他の誰が何と言っても私とあの人にとってあなたは大切な息子よ。もうそんな事は言わないで」紫苑が辛そうな顔をして言う

「……すみません。それでは長くいても母上の体調に悪いので、これで、失礼します。」

「ええ、また明日も来て頂戴。待ってるわ」最後に笑顔で言ってくれたがどこか無理した笑顔だった。

はいと言って部屋を出る。まだ寝るには早い時間なのだがあまり城内をうろついても不快なだけなのでサツサと部屋に戻って寝る事にした。

.....

翌日

何より城内が騒がしい

「どうしたんだ？何かあったのか？」少し騒がしかったので部屋を出て辺りにいた人に聞いてみる

「ああ若様、だ、旦那様が……」酷く慌てているようだ

「父上に何かあったのか！？」そう言うと旦那様の部屋に言ってくださいと言われ、走って向かった。

廊下全力で走る。途中人にぶつかりそうになったが、今は気にせず父上のもとに急ぐ

…着いた！

「父上！」勢いよくドアを開け中に入る

「おお、璃人か？すまないな、うるさくしてしまって」声に張りがない、というか今にも死にそうだ。部屋には紫苑もいて寢床で横になっている父の手を握っている。しかもその顔からは涙が流れている

「あなた」

「すまないな、紫苑。お前に負担を掛けたくはないのだが、どうやらもう限界らしい」

「そんな事言わないで！あなた。まだ新しくできる子に会ってないでしょう！」

「ああ、それだけが悔やまれる。娘になるか息子になるかは見たかったな　璃人がいるから娘が良いな、紫苑に似て美人になるだろう」

「なら、頑張ってください。私も頑張りますから！」

「おい　おい、無理はするなよ。子供に…何か・合ったら…大・変だろ？」

「でも！」

「これも運命だ。それに医者　が言うには　いつ死んでも可笑しくないらしい。逆に良く　持った方　だと言わ…れてし　まった  
「お」

「そんな…」紫苑の涙は止まらない

「璃人、こっち に来てくれる・か？」

「はい。」そう言つて父の顔が見えるところに行く

「私は もう ダメだから、お前が・・紫苑や・・新しい・・家族を 守つて…欲しい」

「オレには…まだ無理です。母上達を守れるような力は…」

「お前が 悩んでいたのは…知っている。すまなかつたな、その目にして…しまつて。でも、お前が優しい子だという 事も知っている。それに お前は優秀だ。だから、お前なら…守れるさ」この目は父上達のせいではないのだが、父上を後悔させたまま死なせたくない

「……頑張つてみます。あなたの息子として！」今自分にできる精

一杯の言葉を送る

「ああ、その言葉が聞ければ満足だ。紫苑すまないが 先に行く、私の事を 忘れて幸せに なって・く・れ」その言葉を最後に母上の手を握っていた手がダランと落ちた。その動作が死んでしまったというのを鮮明に物語っている

「あなた！あなたああああ！！！！！！」母上の鳴き声が室内に響き渡るのだった。

…しばらく経って、母上がなんとか持ち直す

「母上」

「大丈夫よ璃人。あの人が愛した女は簡単に崩れるほど軟じゃないわ。ただ今日だけは 「そう言っただけ」オレの胸に抱きつく。まだ子供なのでオレの方が小さいのだが今日の母上は自分よりも小さく感じた。このまま静かに終われば良かったのだが

「失礼するよ」変なオヤジが入って来た。確かあいつは…

「韓玄！何しに来たの！」

「随分だな黄忠、夫が死んで気が立っているのはわかるが、人に当たるのは良くないぞ」

「出っけて行きなさい！あなたの顔なんて見たくないわ！」

母上がなぜここまでこの人を嫌うのかと言うと何かと父さんにイチヤモンをつけてきたからだ。優秀だった母上はもともとこいつが治めていたこの城を劉璋から任された。その事に腹を立て色々と思さしようとしたのだが、母上の方が全てにおいて上なので何もできず、母上より少し劣る父上は色々と罵っていた。自分の仕事をわざと押し付けるなど、やる事は三下なのだが、そのせいで父上の疲労がたまり病気になったとも考えられる。直接ではないにしろ間接的に父上追いつめた人物だ

「用事がすんだら、帰るとするさ。オレがここに来たのはそのガキによつがある」

「璃人に何する気！？」

「おつと誤解するなよ。これは劉璋様の命令だ。そこのガキは益州では不幸を呼ぶとされる赤目の持ち主だそつだな」

「何をでたらめな事を」

「証拠はある。おいガキそのバカが死んでどう思った？オレは最高だ、何せオレが色々と仕事を回して過労死させようとしたんだからな。どうだ？オレが憎いか？」

「貴様！！」母上が襲いかかるうとするが

「これが証拠だ」

「！！」母上がこちらを見てしまった

「聞いたぜ、そのガキは感情が高ぶると赤目になるんだってな。その風貌に赤目、不幸を呼ぶガキとは良く言ったものだ。お前の旦那もこいつのせいで死んだんじゃないのか？ちなみにさっき言った事はこいつの目を確かめるために言ったウソだ、クツクツク」全くウソじゃない事を笑い方が証明している

「それでオレに何の用ですか？」頭の中はキレているが、それを出さずに無表情で答える

「ち、気味の悪いガキだぜ。お前は益州から出て行け。本当は処刑されるはずだが、敵顔のやつが劉璋様に言いやがったせいでそれは無しだ。だが益州からは出て行け。良かったな殺されなくて。まあでも益州だったらどこも変わりはないがな。それと黄忠、拒否は認められんぞ！お前が庇いだてした場合は一家そろって追放だそう

だ。劉璋様はお前を評価してるようだからガキだけ見捨てれば助かるぞ」

「韓玄！」

「おつとオレに当たるなよ。これはこのガキをこんな風に産んだお前の責任だな。調子に乗ってオレの上に立とうとするからこうなるんだ。これからは弁えるんだな」

「それはお主の方じゃな」

「桔梗！」 「敵顔！ どういう事だ！？」

「お主の不正が劉璋様の耳に入った。色々悪い事をやっておつたな。お前はもうお終いじゃ。誰かある！ この者をひっ捕らえよ！」  
そう言つて部下達が入ってきて韓玄は敢え無く御用となった

「ツク、だがそのガキが追放になるのは変わらん！ ザマあ見る！ ハッハハハ」 縄で縛られながらも、最後に吐き捨てて出て行った。

「最後まで下種なやつだったのう。紫苑大丈夫か？」

「ありがとう桔梗。でも」「視線がオレの方に向く

「子苑のことは済まなかった。お前の功績など色々言ってみたが処刑を逃れるので精一杯だった、すまん」敵顔さんは悪くないのだ。むしろ命の恩人でさえある

「謝らないで桔梗、あなたには感謝しているわ」

「そうです。敵顔さん感謝する事はあっても非難するなどと言う事はありません。おかげで生きられるのですから。」

「子苑」「こちらを辛そうな目で見つめる

「母上もすみません。オレのせいで苦勞を 父上が亡くなられたばかりだというのに。」

「良いのよ。もともと私のせいなんだから。ごめんなさいね、あなたの目をそんな風に産んでしまっ…」

「それこそ気にしないでください。この目は意外と気に入っているのです。それに子供の目を正しく産めるかなんて天の人にしかわかりませんよ」

「そうですね。でも、そうだとしたら、私は天に弓を弾くしかないわ。息子を不幸にする天なんて…」

「あまりそういう事は言わない方が良いでしょう。今の時代帝は天子様ですから、勘違いされたら大変です」

「そうですね。それじゃ、そろそろ準備をしなきゃね」

「え〜っと何の？」

「決まっているじゃない。私はあなたが追放される事を良しとしな  
いわ、なら私が出て行くしかないでしょう？」「さも当然のように言  
うが」

「…母上お待ちください。益州からはオレ一人で出ます」

「「！！」「璃人以外の二人が目を見開く」

「ど、どうして？」

「はい、今母上は妊娠中の身です。長期の移動は体に障ります」

「でも」

「母上、父上との約束でもありません。仮に母上と共に此処を出たとしてもオレのせいでどこにも士官できません。それに出産後は何かと忙しいでしょう？まず武官としては雇ってもらえないでしょう」

「ならせめて桔梗の所に。お願いよ桔梗、璃人を」

「すまん。それもできんのじゃ。韓玄のやつが劉璋様に色々言ったせいで、わしの所でも預かれなんだ。紫苑と親しいわしのところにおれば、いずれ戻ってきてしまうだろうと。わしが匿った場合は今度わしの治めている巴郡の民に迷惑がかかってしまう。許せ紫苑、子苑」悔しそうに言う桔梗

「いえ、オレ一人と民とを考えれば当然の結果です。お気になさらず。」

「璃人…」涙を流しながらこちらを見る母上

「母上だから、オレが家族を守る最善を選ばせてください。母上や産まれてくる弟か妹を守る最善を。」

「……めん なさ い」泣き崩れる紫苑

「いえ、母上も元気な赤ちゃんを産んでくださいね」そう言って部屋を後にする。部屋からは母上の泣き声が聞こえるが、厳顔さんに任せて自分の部屋に戻っていった。

## 第2話 旅立ちとあわわ

母上の部屋を出てから身支度をし町を出る準備をする。幸い父上の仕事を手伝いながら貯めたお金があるのでしばらくの間はなんとかなるし、前の世界での経験から山で暮らせば問題ないだろうとも思っている

「よし！行くか」そう言っつて部屋を出ようとすると敵顔さんがいた。

「まあ待て子苑。こいつを持って行け」そう言っつて一つの弓とお金の入った袋、さらに包帯が渡される

「なぜ包帯を？」

「わしが気づかぬと思っつたか？子苑、韓玄がいなくなるまでずつと拳を握っつておつたら、床に血が落ちていたぞ」父がバカにされて我慢ならなかつつたがこちらが切れたら状況が更に悪化するので我慢していた。その時目一杯ちからを入れてたため手から血が出ていた。敵顔さんはそれに気づいて包帯を持っつて来てくれたようだ。

「ありがとつございます。じゃあ、これは何ですか？」貰つた包帯を巻きながら弓について聞いてみる

「お前の両親がお前のために用意したものだ。お前の鍛錬を見て作つたらしい。金の方はわしと紫苑からじゃ。今紫苑は眠ってしまつてな、代わりにわしが渡しに来た。受け取れ」

「はい。今のままでは少し大きいですが、これが扱えるように頑張ります。爺顔さん、母上をお願いします。」母上の事は心配であるがオレが此処にいても状況は好転しないので爺顔さんに任せる事にする

「自分の心配より親の心配か？お前も変わった小童じゃの」安  
心せい、紫苑の事はわしに任せて精一杯生きる。お前ならいずれ一  
角の将になるやもしれん」

眉を少しひそめ困った顔をする爺顔さんだが、同時に励ましてく  
ているようでもあった。

「ハハ、オレは臆病ですからそんな者にはなれませんよ。自分の事  
で手一杯で、他人まで考えられませんか。…では、行きます。  
生きていたらまた会いましょう」

「バカな事を言うな。絶対に生きて会おうのじゃぞ。その時はわしの  
真名をお前に授けよう」最初の言葉に怒ったようだが、最後は笑顔  
で言ってくれる

「八八、じゃ頑張りますね。では」そう言って出口の方に歩いて行く

「達者でな」巖顔さんもこちらを見ながら別れを告げる。12年間暮らした場所を出るのは、名残惜しいけど、仕方ないかなと思いい城下を出るのだった。

-----

今は益州を出るため歩いている。前の世界でも8歳で世界を廻っていたのでどうという事はないのだが、仕事がないのが問題だ。この時代は国が衰退していて武官など以外仕事先がなかなかない。とりあえず、落ち着いて考える事が必要なので益州を出て荊州に入り山の中で休憩をとる事にした。

山は食材の宝庫で生きることには困らない。しかも運の良い事に誰も使っていないような小屋があるので、ここで生活する事にする。なるべく金は使わず、動物や木の実を食べて行けば当分大丈夫だろう。幸い川も近くにあるので水浴びもできるし。まずは食糧調達

野ウサギと木の実をゲット。ついでにゴンを見習って釣りもしてみ

る、絶で気配を消しながら魚がかかるのを待つ。おお、掛ったあ！  
一気に引き上げる。前の世界にいたような巨大生物ではないが、な  
かなかおいしそうな魚だ。とりあえず、あと数匹釣ろう。

しばらく経って食料も取り終えたので、鍛錬の時間に入  
る

「まあ基本の四大行をきっちりやらないとな」そう言いながらもまず  
纏と練をひたすらやる事にした。当然基礎体力をつけるために近く  
に有った岩を担ぎながら走る。昼からずっとやっていたためかなり  
の疲労感である。だが昔の感覚が戻りつつあるので良しとする。さ  
すがにオーラの総量はまだまだだが。

夜に食事をとってさっさと寝る事にする。明日からどうしようかと  
思い、火を消し小屋に入った。

森で集めた落ち葉の上に寝ていると何やら音がする。

ガサゴソ……ガサ ……あつ

何か人の声が聞こえた

「円」今はまだ基礎能力が足りないので仕方ないので緋の目を使って円を発動する。これにより半径15メートルほどの円ができたが、持続時間が10秒と持たない。ちなみに前の世界でのMAXは半径200メートルである。逃げる事に最大限特化したため円の範囲を伸ばす事に努めた。それも緋の目があつてのことだが…

「これは人か？それも随分と小さいな」小屋の前に広げた円に入つた者を捕らえた。どうやら人らしく、どうしてこんな所にいるのか気になる、小屋を出てみる。そこで見たのは

「なんで幼女が此処にいる」思わず口に出してしまった。しかも、その言葉に気づいてこちらを見る幼女、若干涙目である

「あわわ、うっうっ、どなたでしゅか。噛んじゃった」なんかカミカミ口調の幼女が尋ねてきた。しかもベロが痛そうである

「ん〜浮浪者？もしくは旅人。で、そちらはなぜこのような所に？危ないですよ」

「あの、あの、薬草を取りに うぐ 朱里ちゃんと…ふ…ず…ず…水鏡先生と来たら…うんぐ 逸れちゃって、そ、それで、森を出ようとしたら迷ってしまって 「事情はわかったが、話すたびに泣きそうになるのはやめてもらえないだろうか。なんか泣かせてるみたいで嫌だ。」

「ああ、事情はわかりましたのでとりあえずは泣き止んで下さい。オレで良ければ明日には森を出るとこまでなら案内できるので」

「あわわ」

「その口調はわざとですか？」

「す、すみません。男の人に 慣れて いないもので」

「そうは言っても、オレはまだ子供ですし。迷ってしまったあなたが一人で行くのは危険ですよ。森の中には危険な動物もいますから。今夜はここで休んで行きませんか？」

「あわわ、あ、ありがとございませし…す。また噛んじゃった」

「その調子で舌を噛んで行ったらその内、切れるかもしれませぬ」

「うっうっうっ」

「ああ、泣かないください。オレが泣かしたみたいじゃないですか」「実際に泣かしたのだけど…」

「ぐすん はい。今晚、お世話になります。」

「どうぞ、オレは小屋の外にいるんで何かあったら言うてください」

「あのあの、それは悪いですう。わ、私が外」

「寝れるんですか？この危険な森の中で一人外で無防備に」

「あわわ、怖いでしゅ…またやっちゃった。」

「だから、オレが外にいますよ。幸い逃げるのは得意なんで仮に狼に襲われたとしても逃げれます。その場合はあなたを置いて逃げますが…」

「置いて行っちゃうんですか！？あわわ、どうしよう。」「本当に焦

り出す幼女

「小屋からでなければ問題ないでしょう。まあオレは戻ってくるかわからないので、あなたは一人で森を出る羽目になりますか…」

「あのあの一緒にいてもらえませんか？」

「でも、男性は苦手なんでしょう？男性と言えるほどの歳じゃないけど、オレも男ですよ」

「大丈夫でしゅ。…痛い…あなたからは悪い感じがしませんから」

「まだ子供ですからね。むしろ今の段階で悪い感じがしたらオレの将来が心配ですよ」

「あわわ、すみません。」そう言って焦り出す幼女。この幼女を、置いて行っても良いのだがさすがにそれは何か人として大事なものを失う気がしてやめた。

「とりあえず、自己紹介をしましょう。オレは性は黄、名を恩、字を子苑と言います。あなたは？」

「あわわ、わ、私は性を鳳、名を統、字を土元と言います。よろしくお願いします」

「よろしく。とりあえず、小屋に入りませんか。中に食べ物がありますし、食事してないのでしょう?」

「大丈夫　　ぐう　　夫」

「じゃなかったみたいですね。それじゃ、入りましょう」顔が赤くなった（実際は暗くて見えないので予想）鳳統さんを小屋に招く

「あうう、すみません。」鳳統さんもお腹が空いているらしく普通についてきてくれた。

-----

翌朝

「起きてください。そろそろ出発しますよ」鳳統さんを起こす。昨日は離れて寝ようとしたが、オレが言った冗談を真に受けたのか、オレの服の裾を話してくれなかった。仕方ないので背中合わせで寝れば良いだろうと提案したが、器用に服をつかみそのままに寝てしまった。まあ、寝方なんてどうとでもなるので気にせず寝て朝にな

って起きた。

「あ、う、あ……え!？」寝起きの鳳統さりがこちらを見てビククリする

「あ、起きましたか？起きたんなら服を離してください」

「あ、すみません」すぐに手を離す

「それじゃ、朝ごはん食べたら行きますよ」

「え、こんなに朝早くですか？」外をみると太陽がまだ昇っていない。もう少しで日の出を迎えそうだ

「だって、森を出たは良いけど、探しに来たあなたの家族の人と行き違いになったら大変じゃないですか。だから先に降りるんです。それに朝の方が動物に出会いません」

「な、なるほど」そう言って感心し、朝ごはんを手早く済ませ下山の準備をする。

下山中

いったん山を降りる序にオレも町まで必要なものを買いに行こうと思う。手荷物はそこまでないが、お金とか武器とか置いておいて動物に荒らされたり、誰かが盗んで行くとも限らないので、一応持つて来てはいる

「とりあえず、森さえできれば町までの方向はわかるんですね？」

「はいです」

「じゃあさつさと降りましょつか？」

そう言つて山を下る。オレ一人ならすぐにも降りられるのだが、鳳統さんがいる以上ゆっくり下りなければならぬ。狼や熊などもあるので周りに注意しながら進んでいると、鳳統さんの方から話があつた。

「あの、黄恩君はまだ子供なのになんで旅なんてしているんですか？」

「……まあ色々とあるんです」益州では赤目は憚れるけど、荊州ではどうかわからないので、緋の目の事は言わないでおく。当然それが理由で州を追放された事も

「すみません」こちらの様子を察したのか鳳統さんの様子が暗くなる。気分を変えようと鳳統さんに話を振る

「鳳統さんはどうです？昨日先生とおっしゃってましたが、どこかの私塾で学ばれているんですか？」

「はい。水鏡先生という人のもとで色々な事を学んでいます。私は身寄りがないもので、水鏡先生にお世話になっているんです。だから、先生の役に立てるように頑張っています」

「申し訳ありません。」

「いえ、気になさらないでください。こちらも言い辛い事を聞いてしまったみたいなので」

「そのことなら、お気になさらず。大したことではないですよ。」

まあ謂わば修業みたいなものです。」

「修業ですか？私と同じですね」

そうですねとお互いの過去を気にしないようにした。しばらく、歩いて開けた道に出る

「ちょっと、止まってください」

「なんですか？」

「これを見てください。熊の足跡ですね。しかもできてからそれほど経っていない。近くに熊がいるかもしれないので気をつけて進みましょう」

「あわわ、気をつけます」そう言って鳳統さんはオレの服をつかんで歩く。さり気に逃がさないようにしてるあたりなかなかやる幼女である。まあそう簡単に会わないだろうと歩いて行くと

「わあ〜おう、なんて絶妙なタイミング」

「たいみんぐ？つてそれより、黄恩君、早く逃げないと！」鳳統さんが慌てだす。なぜなら30メートルぐらい先に熊が見える。鳳統さんが叫んだ事で、熊がこちらに気づいたようだ

「だあ〜叫ばないでくださいよ！やり過ぎせたかもしれないのに！こうなったらあなたを置いて」

「あわわ、助けてください」泣きながらしがみつく鳳統。こちらの冗談を本気と捉えたらしい

「冗談ですから、離してください。オレも逃げたいのは山々なんですよ。マジ怖いんですけど…」

「まじ？」

「本気と言つ事ですよ　　うわああ来た！」熊がこちらに向かつて来た

「あわわ」パニクリだす鳳統さん。そのおかげで服を離してくれた。今なら逃げれるが、さすがにできないので、後ろに背負っていた弓を取り出す。

「下がっててください。これではずしても恨まないでくださいね？」  
「そう言われても腰をぬかして動けない鳳統。」

チツと舌打ちしながら弓を構える自分の背丈と同じくらい大きいので弦を弾く力がかなり必要だ。普通の子供ならまず弾けないが

「練」一瞬にしてオーラを練りあげる。本当な周で武器を強化して飛ばしたいところだがまだ無理だ。

「鳳統済まないが下がってくれ、邪魔だ」いつもとは違う雰囲気。鳳統が吞まれながらも、見てしまった：璃人の赤い目を。普段髪に隠れて見えないがはつきりと見えてしまった。

璃人は自分の力だけじゃ弓が弾けない事がわかり緋の目を発動。オーラの絶対値があがったので弓を弾く十分な力になった。

鳳統も一瞬緋の目に魅入ったが、なんとか正気を取り戻し後ろに下がる

「……」精神を集中させ狙いを定める。紫苑から教えを受けている  
が実戦はこれが初めて。だから言われた事を忠実に守る

『良い？弓は当てようと思って放つものではないの。当たる事は決  
まっけていて後はその軌道に矢を乗せるだけ。大事なことは点で見  
るのではなく線で見るの。そこに乗せられれば100回やったって外  
さないわ。』

(狙うは頭。足や胴体に当たっても今のオレの威力じゃ殺せないか  
もしれない。なら、一発で仕留められる頭を狙う。距離は 6メ  
ートルくらいが限界か。一気にオーラを放って足止めして、そこを  
射る)

…… 15メートル

…… 10メートル

8メートル

…… 6メートル

「フ！」

おし、ひるんだ。まだ今のオレじゃ強力なオーラを飛ばせないから、殺す事はできないけど、足止めくらいはできた。あとは…

「ハ！」熊の眉間に描かれた線の軌道に矢を乗せる。

放たれた矢は一直線に熊の額に飛んで行く

「おし！」見事熊の額に命中し熊は悲鳴を上げる事なく絶命。緋の目を解除し熊の様子を確かめる

「やっぱ死んでるな。だけど折角の食料をここに置いておくのは勿体ないから、持って行こう。鍛錬にも成るし。」そう言って熊を持ちあげる

「鳳統さん悪いんですけど、弓だけ持ってもらえませんか？熊を背負ったせいで持てなくて」

「…」反応のない鳳統さん

「あのくもしもし」顔の前で手を振ってみるが反応なし。仕方ないのでほっぺをつついてみる

「お、柔らかくて面白いな。つ〜ん」面白がって遊んでいると

「あつ!?!あわわ、何するんでしゅか!」

「いや、声を掛けても反応しなかったので、つついてました」

「ビックリしてただけです!」

「まあそんな事はどうでもいいので、この弓持ってもらえませんか?そこまで重くはないと思うので」

「良いですけど　ってなんで熊を背負っているんですか!?!」

「いや、食料になるし、町に行くなら売れるかな〜と思いついて」

「確かにそうなんですけど　というより熊を抱えられるなら、私を担いで逃げた方が…」

「確かにそれもできましたけど、あなたが恐怖のあまりしがみ付いて、逃げるタイミングを失ったんですよ。それに逃げる最中に騒がれても面倒なので、ここで対応するのが一番最善だと思っただけです」

「あうあう、ごめんなさい。それと、さっきも言っていましたけど、たいみんぐ？ってなんですか？」

「ああ、好機とか時期みたいな意味です。勉強が足りませんよ、私塾生殿。」そんな言葉この時代にないので当たり前であるが、かかってみる

「あわわ、頑張ります。」

「それじゃー行きましようか？」

「はいでしゅ」「今のは痛そうだな。」

.....下山終了

「ここが出口ですね。今度はこっちが案内してもらおう番ですね。よろしく願います」

「はい、任せてください」

鳳統さんの後に付いてしばらく歩くと町が見えた。意外と近いな

その後は鳳統さんとは別れて熊を売りに行く。弓はなんとか持っている

「おじさん、この熊いくらで売れる？」

「おお、坊主、運よく死体でも見つけたか？ん、熊は意外と珍しいからな、これくらいでどうだ？」

物の相場なんてわからないので、なんとも言えないが熊1頭がこの値段だと森にいる熊全員狩ったって大した金にならない。完全に舐められている

「おじ　　ちよつと待ちなさい　　さん？」知らない女性が話に入ってきた

「なんだい、あんた？今はこの坊主と商売してるんだ。邪魔しないでくれねえか？」

「それを待ちなさいと言っているんです。あなた、子供だと思って騙すつもりですね？そんな値段で熊が取引されてるなんて聞いたことありません」

「ぐツ。何なんだあんた！人の商売の邪魔しやがって」

「そんなの商売とは言いません。あなたの事は商人の人に言っておきます。この地で商売ができるとは思わない方が良いでしょう」

「覚えてろ！」「そう言って商品をまとめて逃げ出すおじさん。」

「全く仕方ありませんね」

「あゝ」

「はい？」

「ありがとうございます。おかげで騙されずに済みました。」

「いいえ、あなたにはお礼がありますから」

「お礼ですか？」

「はい。…雛里、こちらに来なさい」

「はい、水鏡先生」そこには先程別れた鳳統と新たな少女がいた。

「ああ、あなたが水鏡先生ですか。私は黄子苑です。よろしく願います。」

「私は司馬徽、字を徳操、号を水鏡と言います。基本水鏡と呼ばれているのでそちらで呼んでください。あなたには雛里がお世話になりました。」

「いえ、オレもあなたに助けてもらったのでお互い様です」

「でも、その必要はなさそうでしたね。あなたはちゃんとわかっていたようですし」

「相場なんかはわかりませんが、あの値段だったら、森の熊を全滅させても足りないな」と思ったくらいです。その後値切られたかもしれません。そう考えれば、助けられたのと同じです」

「そうですか。でも、私のかわいい弟子を助けていただいたのにこれだけで済ますのは忍びないので、私が良い店を紹介しましょう。」

「なら、お言葉に甘えて」そう言って水鏡について行く。ダブル幼女もついてきたので、鳳統の方に弓を預けた。普通に持つてくれて良い子だと思った

熊を担いだ少年と二人の幼女（片方は武器持ち）に先頭に行く女性なんか変なパーティーができた。これで、キメラアント討伐にでも行ったら3秒持たないだろうな

その後水鏡の紹介してくれた商人のもとで熊を売ってお金に変えて帰ろうとしたところ

「ちょっと良いかしら？」

またしても水鏡に止められるのだった

### 第3話 能力確認とはわわ

熊をお金に替えたので、とりあえず、山に戻り修業でもしようかな  
と思っていたところに水鏡先生が話しかけてきた

「一体何のご用でしょうか？鳳統さんを助けた事なら、この一件で  
済みましたので気にしないでください。」

実はサツサと帰りたいたいと思っている。熊での一件でもそうだがこの  
先修業しておかないと本当に命の危険があるという事をまざまざと  
感じた。

「いえその事ではありません。あなたは今、修業の旅をなさってい  
るのですよね？」

「まあ一応」

「では、学問の方も修めてみませんか？」

「一体なぜ？」

「先程の会話から察するにあなたは鍛えれば優れた人物になるはず

です。うちの弟子二人に負けなくらい」

「学業はあまり得意ではありません。それに鳳統さんから聞きまして、ただ、あなたの私塾って女学生専門なのでしょう？男のオレが入るのはおかしくありませんか？」

「確かに、そうですが、あれは男女で共同生活する際に問題行動があると困るから、決めたルールです。こちらで判断し問題なしと判断されれば男子でも入塾は可能なのです。今の所いませんですけど」

「オレは問題ないという事ですか？」

「はい。雛里にも聞きましたが、あなたは信用に足る人間だと判断しました。」

「…でも止めておきます。別に人の上に立ちたいわけではないので、学問はあまり必要ではありません。それに、今、生きて行くのに必要なのは知力ではなく体力です。最終的には、体力だけでなく知力もという形にはしたいですが、今は体力です。でないと」  
「水鏡先生の後ろで待っていた二人。しかも、周りを気にしていなかったのか、後ろから来てる人に気づいていない。」

「キャ！」 接近してきた男たちが二人を捕まえて逃げようとする。

当然水鏡も追いかけてよとすが追いつかない。しかし、

「おじさん、人攫いは立派な犯罪だよ。さっきのでそのまま、町を出て行けばよかったのに、自分で罪を重くしちゃったね。悪いけど二人は返してもらおうよ」

二人を捕まえて逃げようとしたオツサンに忍び寄り背後から首筋に一閃。オツサンは一瞬で気を失い地面に倒れる。キルア直伝だがあいつが本気でやったら、首が飛ぶんだろうなと思いつつも、そんなスプラッタな光景を目の前の幼女達に見せるのは忍びないので、気絶程度で済ませる

「お二人とも周りに注意を配れないのは危険ですよ。いついかなる時も自分の周囲には気を配るものです。オレがいなかったらその人に攫われて大変な目に合ってしまったよ」

「っし、しゅみません！助けてくれてありがとうございます」「幼女がぺこりと頭を下げる。二人とも同じように噛むとは、姉妹だろうか？似てはいないが……っは！まさか、水鏡塾は幼女を力ミカ三口調へと誘う魔境なのでは。なんて恐ろしい場所

そんなアホな事を考えながら、警備の人に先程のオツサン（最初にオレを騙そうとして逃げて行った商人）を渡し、礼を言われてから水鏡先生の所に戻る。

「今度は朱里まで助けていただいて、本当にありがとうございました。」

「まあ、良いんですけど。ああいう人は、最後まで恨みますから、徹底的にやるのが一番なんです。下手に注意とかして恥をかかせるたりすると後々必ず仕返しにきます。経験上、これからも狙ってきますね。まあ、それはここの太守様に任せますけど…」

「経験上って 前にもこういう事が？というよりいつからひとり旅してるんですか？」

水鏡の質問にしまったと思ひなんとかごまかす案を考える。実は前世で何回か経験してるんですよアハハとは言えないし、一体どうするべきか…

「答え辛い質問なら無理して答えなくても良いですよ。それより先程の話ですが、やっぱりお願いできませんか？もしまたあの輩に狙われたら私では対処できないと思うので」

「用心棒扱いですか？うーん自分の修業もしたいのですが」

「家の庭は広いので修業する場所としては申し分ないですよ。昔は人数がいたので結構広いです。それに朱里や雛里に護身用程度の武術を教えるもらうと助かるんですが…」

「ちょっとかり仕事内容増えてませんか？…まあ、止まる宿が確保できたと思えば幸いか。先程撤回して申し訳ないですがお世話にならさせてもらいます。」

基本的に臆病だが、善人であるためこういう頼み方をされると断れないのが弱点でもある。ハンター協会に強制でやらされた時はネット会長に勝てなかったというのもあるが、仕方ないかなと割り切った部分がるのも否定できない。ただ、前世とは違い今世では自分に危険が及ぶようなら逃げようと思っている

「荷物は持ってきているので問題ないです。水鏡塾に案内してくださいませんか？」

「はい、それではこちらです。」二人の少女と手をつなぎながら歩き出す。…！？

「なぜにお二方は人の手を握っていらっしやるのでしょうか？」

「あわわ、ダメでしょうか？先程の事で怖くて動けないんです。」  
涙目で見るのはやめて欲しい

「はわわ、私も怖くて」同じように涙目。しかも周囲からの視線が痛い。こちらが泣かしてるように見えるのだろうか？

「ダメじゃないですけど、その口調どうにかありませんか？あと鳳統さんオレの武器を持ってください」

「あわわ、了解でし」

「慌てなくて良いですよ。それとあなたの名前を聞いてませんでしたね。オレは黄子苑と言います。これから、なにかとお世話になると思いますのでどうぞよろしくお願いします」

「はわわ、こちらこそお願いしましゅ。わ、私は性は諸葛、名を亮、字を孔明と言います。」

「あなたもそんなに慌てなくて良いですよ。それと水鏡塾に案内してもらえませんか？いつの間にか先生がいなくなってしまったので……」

辺りを見ると水鏡先生がいない。完全に置いて行かれたようだ。それに案内する二人が、かなり頼りない。このさき本当に大丈夫だろうか？……先の不安な人生である

.....

幼女に引き連れられて水鏡塾に到着

自分の部屋が用意されそこに荷物を置いた。その後鍛錬でもしようと思っただが、水鏡先生が授業を受けてみない？というので受ける事にする。

「今日は孫子について学びましょう。では 兵とは国の大事なり。死生の地、存亡の道、察せざるべからざるなり。故にこれを経るに五事を以てし、これを校ぶるに計を以てして、其の状を索む。」

そう言っただけで講義が始まる。孫子とは昔の学者さんらしく、いろんな書物を残しているらしい。その中でも兵法に関する者が多いらしく、今の時代でも多く学ばれているようだ。

「子苑これについて意見はありますか？」先生はオレを字で呼ぶようになった。これから一緒に生活していくのだからという事らしい。

「別にありませんよ。無駄な戦争をしない、大いに結構。戦いはなるべくしたくありませんから。それに戦で命を落とすのは兵なのだから、大事にしないと国が成り立たなくなる。偉い人こそ知って欲しい言葉ですね。」

「その通りです。そのための五事があるわけですが……」そうしてまた講義に戻る。ぶっちゃけオレにはあまり関係ない。国を治めよとは思わないし、その器もない。母上や父上を見て思ったがかな

り大変そうでおれとしてはのんびり過ごしたいのもものすごく遠慮したいところだ。…おつと適当に聞き流してたらいつの間にか戦術の話しに行ってしまった。

「昔の善く戦う者は先ず勝つべからざるを為して、以て敵の勝つべきを待つ。子苑君、これについてはどう思いますか？」はわわが聞いてくる。オレは二人の事ははわわ先輩とあわわ先輩と読んでいる。二人の口調が直るまで呼び続ける気だ。

「どう思っても何も、当たり前の事だと思っただけです。攻める事を考える前に、守る事を考える。仮に単騎で突っ込むというなら守りなど考えなくても良いでしょうが、町を治めたりするお偉いさん方はそんなことはできません。相手の城を落したは良いけど、自分の城が落ちてましたと言ったら笑い話にもならないじゃないですか？まずは攻められても大丈夫なように守備を強化するのは当然です。それにこれは街の発展にも繋がりますし」

「発展ですか？」今度はあわわが尋ねてくる

「発展してる町とはどういうものだと思いますか？あわわ先輩」

「その呼び方止めてください！」

「口調が直ったら考えます。そんな事よりも」

「直つても考えてくれるだけなんですネ……。人がたくさんいて活気のあるところだと思います」

「そうですね。ではどうすれば人が集まるのでしょうか？」

「当然安全な場所ですね。その土地が安全であれば人は集まります」

「そう、だから、まず守備を固めなきゃいけないんです。戦はお金を使います。でも、お金はただ待っているだけでは集まりません。ではどうしたら？」

「町の人に税を納めてもらうしか…」

「そうですね。後は有力な商人や豪族なんかからも寄付金として集める事になります。しかし、人の人数が少なければ集める税は一人当たりかなりの負担になるわけです。これでは民から不満が残ります。つか内から潰れて行くでしょう。だから人を集めて税率を変えるしがあります。そして人が集まる所とは安全な場所です」

「だから守備が必要だと」

「はい。それに国の守りが強固であればある程他から攻められることは少なくなります。これは無駄な戦を回避するのに大きく役立ちます。」

「で、でも、守備を強化するのにもお金が必要じゃないですか？」

「それは」

「「そ、それは……」」

「わかりません」

二人が全く同じ感じでコケる。やっぱり姉妹ではないのだろうか？

「オレが言ったのはあくまで孫子の話ができたらと言う点で言った  
までです。理想論は言うだけならタダです。それを実現できるもの  
が為せばいいだけです。一応考えはありますけどね？」

「どんな考えですか!？」

「教えません」

「な、何ですか!？」

「なんでも教えてもらえるなんて思ったら大間違いですよ?わから  
ないから考える是ぞ学ぶ者の本懐ではありませんか?私塾生殿」

わざとらしく、口をつり上げて言う。実際考えがあるわけではない。  
あるにはあるけど実行ができないだけ。キメラアント討伐の際にネ  
フェルトピーが使った超巨大な円とで感知し超長距離の一斉射撃。  
どちらも念の習得とかなりの才能が必要なため実行は不可能である。  
次点で町の各所に長距離砲（投石機）を設置が考えられるがこれは  
お金がかかりすぎる。自分で作ればなんとでもなるのだけど

「うっ、頑張ります。」

その後は先生の授業に戻りあわわとはわわが質問を繰り返すという内容だった。この二人賢すぎないか？と思ったのも仕方がない。

- - - - -

講義が終わったので、今度は自分の鍛錬に入る。庭に出て軽くランニングから入る。なぜかこの家には重りが置いてあって今はそれを背負いながら走っている。だいたい10キロくらい。この世界のレベルがどれほどかは知らないが、今の所オレのアドバンテージは念が使えると言う事。母上や敵顔さんの話だと気と言うものを使える者もいるらしいが（敵顔さんは使えた。）念ではないという判断。しかし、念抜きで岩を砕く敵顔さんや気を貫通するほど矢を放つ母上をみると楽観視できない。

あちらの世界では、確かキルア達の腕力は異常だった。ゴン曰く16トンは有るとの事。家に入るには4トンの門をクリアしないと帰れないらしい。どんな家だよ！と突っ込んだのはしょうがない事だ。しかし、この世界ではそこまでの腕力がなくても簡単に人を吹き飛ばす。一度敵顔さんの訓練を見たがオーラを纏っていない拳で人が飛んでいた。下手すれば硬を使わないといけない。

推測してみるに、あちらにはインチキな魔物がたくさんいる分、それに比例して元々の人間の能力も高かったのではないだろうかと考える。そのぶんこちらの世界では、それなりの腕力が有れば人が飛んだりするのだろう。となると、ネテロ会長のような人間がいるわけではなく、音を超えるような拳は放てないだろう。鍛錬でどこまで

伸びるかわからないが基礎を固めたら念に重点を置いた方がいいだろう。

今やっているのは堅の修業。堅を十分伸ばすには普通のやつは1ヶ月はかかる。前の世界では念を覚えた頃からやっていたので、ゴンやキルアよりは長くできたが、あいつらの成長を見た時は本気で羨んだ。まあ今は置いておいて堅の修業である。しかし、何もしていないのもあれなので少し発展形に行きたい

「水鏡先生、この一角畑に変えても良いですか？」

「良いけど大変よ、なかなか広いし一人じゃ大変じゃない？」

「まあこれも修業と言う事で。」そう言って縦横20メートルくらいの土地を耕す事にする。この時代は前にいた世界と違って発展してないが、スコップの様な物や鍬のような物もあるので体力さえ続けば問題ない。

「周」鍬をオーラで纏う。通常応用技と言われるものはオーラの消費が激しくきついものだが、だからこそやる意味がある。堅の持続法と周をする事に大した違いはない。

「さて行きますか」鍬を両手に持って耕し始めた。

-----

畑を耕し一ヶ月

堅を維持する時間が少しずつだが伸びてきた。さすがに庭の畑は三日くらいで終わってしまったので、今は町のはずれにある畑を耕している。ここは誰も使っていないので十分広いしなかなかの鍛錬になる。最初は周だけでやっていたが、今では堅もしながら作業ができるようになった。この分なら二年くらいやれば一日戦っても平気だろう。

それでそろそろ自分の系統を調べようと思う。

「子苑君何してるんですか？」はわわ先輩が聞いてくる。後ろにあわわ先輩もいて二人で勉強していたらしく桶に水を入れて運んでいるのを見て、気になって追って来たようだ。ん〜どうしようかな。・  
・まあ別に見せても問題ないだろう。この世界にも気があるという事なので、その練習という事にしておけば問題ない。

「気の修業ですよ。ずっと昔に文献で呼んだ自分の気の種類の見分け方があるので、今試してみようと思っただけです。」実際そんな文献はこの世界にはないのだが、問題あるまい。

「子苑君気を使えるんですか！？あわわ、すごいです」

「まあ、人並み程度ですけどね。」

「それで、どうやって調べるんですか？」はわわ先輩はその方法の方が気になるらしい

「まあこの樽の水の上に葉っぱを乗っけて」

「乗っけて？」

「祈ります」

「祈るんですか!？」

「はい、神様にお祈りしてその時の樽の様子を見るんです。はわわ先輩少しやってみてください」

「はわわ、がんばりましゅ」そう言ってお祈りを始める。内心気づいても良いんじゃないかと思っただが（祈るのと気は関係ない事に気づくはず）面白そうなのでそのまま放置。あわわ先輩も固唾をのんで見守っている。

……

「どうですか？何か変化がありましたか？」

「はわわ、何も変化がありません。お祈りが足りなかったんでしょ  
うか？」本気になって考えるあわわ先輩

「朱里ちゃんもう少し頑張ってみようよ。もしかしたら何か起こる  
かもしれないよ」

「そうだね離里ちゃん、頑張ってみるね」またお祈りを始めるはわ

わ先輩。しかも今度は何か言っている。呪文でも唱えているのだからか？

「まあ、そんなのできたら苦労なんてしないんですけどね。」

「……子苑君！！また嘘ついたんですね！？そうやって」

「いや、普通に気づくと思ひまして。気の識別法なのに気を使っけないからわかると思うんですけど……」

「うううう」顔を膨らましながらも抗議するはわわ先輩

「その顔はやめてください。なんか物凄く罪悪感が……。わかりました、ちゃんと教えますよ。ただこれは気の使えない者にはできないと思うのであわわ先輩とはわわ先輩は見えていてください」

しびしび引き下がる二人。どうやら、抗議する事よりもこっちの事の方が気になるらしい。

「行きます」そう言って樽の前で練をする璃人。樽の中を凝視する二人……何も起こらない

「あの～子苑君にも変わってないんですけど」また騙されたのかと思ひ聞いてみるはわわ。

「二人とも樽の水を少し舐めてみてください」そう言われて指を入れて舐めてみる二人。

「はわわ、雛里ちゃんこの水すつごく甘いよ！」

「あわわ、朱里ちゃんホントだね！」交互に指を入れて舐めている二人。鍛錬の成果もあってかなり味に変化があるようだ。この世界でも変化系か、やっぱり変わらなかったか

「味が変わるのは変化系の証拠ですね。気の形や性質なんかを変えるのに特化した系統ですね」

「他にもあるんですか？」

「ええ、強化、放出、操作、具現化、変化、特質この六つに分かれます。ちなみに変化系に多い性格として気まぐれで嘘つきというのが多いようです。「これはキルア達が知り合いから聞いたらしい。」

「「あつてる！」」

「思っても口に出さないください。自覚してるから良いんですけど。お二人は強化系ですかね？」

「どう言ったものですか？」

「基本体とかを強化するんですけど、二人には似合いませんね」

「じゃあなんで私や、雛里ちゃんが強化系だと？」

「強化系に多い性格だからです」

「ちなみに？」

「単純一途！」

「合ってるけど嬉しくない……」

「まあ、あなた達は軍師志望ですから操作系の方が良いのでしょうけど」

「ちなみに？」

「理屈やでマイペ 我が道を行く人が多いらしいです。軍師なら単純な方より理屈屋で物事を客観的に見れる人が良いですね」

「ううう」「単純一途なところがどうも気になるらしい。」

「まああくまでもそう言う人が多いと言うだけで全員に充てはまる訳ではないですけど」

「でも子苑君のは合ってるし、私達も合ってる。かなり精度が高いんじゃない……」

「御二人はまだ強化系かどうかわからないじゃないですか。だから、なんとも言えませんよ」

「うう、確かめてみたいです……」

「まあ気が使えないと無理なので諦めてください。」

「うううう」

落ち込む二人を慰めるのは面倒なので、気晴らしに将棋でもしませんか？と誘うと意外にも乗って来た。この世界には将棋がなかったのだが（似たようなものはある）、あつちの世界でジャポンを訪れた時に出会ったもので世界大会があるらしく、割と有名ならしい。まあチャンピオンは王に殺されたらしいが。それで、なんとなく作ってみようと思い、斬り倒した木から将棋盤を作り、駒も用意した。字に関しては水鏡先生に書いてもらった。オレ自体字はあまりうまくないので・・・

最初は不思議がりながらも字を書いてくれた先生だが、こちらでルールを説明したら試しにやってみようという事になりやってみた。結果は数局やったら負けた。結構自信があつたのに……

その後、勉強になるからと言ってあわわとはわわも参加。この二人もかなり賢いので数局やったら負けた。オレも一応上達しているの  
で、最近の勝率は悪くないが、またすぐに負けるだろう。

「それじゃ、今日はどっちがやりますか？あわわ先輩ですか、はわわ先輩ですか？」

「わ、私がやりましゅー！」

「朱里ちゃん頑張つて！」どうやらはわわ先輩がやるようだ。この人はかなり強いので勝率はギリ六割と言う所。

お互い駒を並べて始める。先手ははわわ先輩。

「今回の賭けは何にします？」

「私が勝つたら今度うどんを作ってください！」

以前、作ってあげたのが意外と好評だった。実は前の世界でハンター試験を受けた時に美食家ハンターを目指すメンチと知り合った。オレも旅をしている頃、いらんな土地を回ったので、いろんな食材を知っている。ジャポンで食べた寿司は美味しかった。メンチも行って見たかったらしく、ハンター試験終了後、晴れて合格したオレ達はジャポンで食い倒れツアーを開催した。というより連行された、道案内として。

そこでメンチはいろいろと料理を覚えたようだが、なぜかオレにも覚えさせようとして、ジャポン食限定だが合格認定を貰った。それでこの世界に来て久しぶりに作るうと思いついてみた。幸いラーメンが有ったので小麦と醤油はあつたし、カツオも採りに行けば良いのでどうにかなった。意外とカツオ節にするのが手間だったがなんとかなるものだ。その内寿司でも握ろうかと思っている。メンチに合格を言われるまで握り続けた。普通何年も修業するらしいが、メンチの容赦ない鉄拳がオレを成長させてくれた。

それで、できたものを試しに振る舞ったら、こうして作るように頼まれる。鰹節が有ればいいのだが、切れていると作るのが面倒なの

で嫌だ。

「じゃあオレが勝ったらそのはわわ口調禁止と言っことぞ」

「はわわ、そ、それは無理です。」

「なら勝てばいいだけです。では先手どうぞ」ここに璃人VSはわわの戦いが始まった。

## 第4話 はわわの思いと璃人の思い

はわわ先輩との知力を振り絞った戦い、お互いが先を読み相手の先を取ろうとする読み合い合戦。      なかなかの名勝負だった。だが一歩及ばなかったようだな、はわわ先輩

「やりました！詰みです。これで私の勝ちですね子苑君」

「参りました。」一歩及ばなかったのはどうやらこっちのようだったらしい。残念だがカツオを捕りに行かなくてはならなくなった。商人の人仕入れてくれないかな。そんな事を思いつつ、皆で検討をしていると水鏡先生が入って来た。

「あら？将棋をやったのね。それに朱里が勝ったみたいね。

…子苑あなた手を抜いたわね？      朱里あなたは勝負に勝って戦いに負けているわね」

「え！？オレも？という状態で先生の次の言葉を待つ

「子苑は子苑らしい戦い方をしてるわね。極力犠牲を出さずに相手に勝とうとしている。朱里、盤上をよく見て見なさい。」

「私の方が被害が大きい。」

「そうね、朱里の採った策は盤面上では正しいわ。勝負と言うことならあなたの勝ちね。でも、仮にこれが戦だったとして、あなたの国はこの先どうなるかしら？確かに勝利したのだから相手の領地を

奪えるけど、自国の兵の損失がでかいわ。これでは国は回らない。」

「だから、勝負に勝って戦いに負けたんですね」はわわ先輩が噛み締めるようにつぶやく

「それでもはわわ先輩の勝ちですよ。これはあくまでも遊戯です。実際の戦を想定したわけじゃありませんので、勝ち先輩の物です」こちらとしては潔く負けを認めサツサとカツオを仕入れに行きたいでもはわわ先輩がどうやら納得がいかないらしい。

「先輩が何と言おうと負けは負けですので、ちょっと材料を仕入れきます。二、三日は戻らないと思うので、その間待っていてください」

「あら、子苑はお出かけ？」

「はい、あわわ先輩との約束でうどんを作る事になったのでカツオを仕入れに行くんですよ。」

「あら、それはちょうど良かったわ、さっき買い物に行ったら偶然カツオを売っていたのよ。子苑が作ってくれたカツオ節も切れちゃったから勝ってきたの。」

「おお、何という偶然。ありがとうございます先生。早速仕込んできますので…」水鏡先生からカツオを受け取り台所に向かう璃人。

「朱里、やっぱり自分の採った策を気にしているの？」先程から黙っていた朱里に水鏡が話しかける

「はい」

「まあ朱里が実際の戦に出たとしてこの策をやるとは思えないけど、どうして気になるのかしら？」

「わ、私、子苑君に勝てると思って少し強引に行っただけです。最終的に王将を取れば良いと思って…」

「まあ遊戯の中だから仕方ないと言えば仕方ないんだけど」

「でも、朱里ちゃんはその事が嫌だったんだよね？」黙って聞いていた雛里が口を紡ぐ

「うん。私は将来、国を平和にするような人のもとで働きたい。そして、平和な世の中にしていきたい。でも、子苑君にはそれができないって、無理だよって言われたような気がする。この勝負も子苑君なら無理すれば戦えた。でも、私の勝ちたいって願望が見透かされたみたいで、すぐに降りるような指し方になった。」

「子苑がそこまで考えて指していた訳ではないでしょうが、あの子は周りの空気に聡い子だから、なんとなく朱里の思惑がわかってしまったのね。あの子なら余計な被害が出る前に投降するでしょうから」

「そうですね。だからこそ悔しい。自分が目指している形は子苑君の方が近かった。」

「でも、朱里ちゃん、負けちゃったらもつと大変な事になるかもしれないよ」「この時代、敗者は勝者に従うしかない。負けた者が何を言っても何にもならないのである」

「確かにそうですね。でも、子苑は相手が朱里だったから、素直に負けただんだと思うわ。本人は否定するでしょうけど」

「どうということですか!？」

「子苑は戦いがあまり好きではないのはわかるわね？」

「はい。」

「あの子ができるだけ戦わない事を目指している。本人曰く臆病らしいけど　あの子は無駄に戦うのが好きじゃないのよ。でも、ただ逃げるわけじゃない。戦うべき時は戦うし、そのために鍛えてもいる。でも、戦わなくて良かったらあの子は真っ先に下るわね。自分よりもうまく領民を導いてくれる人がいるとわかったら。」

「それが私ですか？」

「そうですね。今回あなたは勝利を優先し勝利した。仮に子苑が抗っていたら、どうなったかしら？」

「良くて共倒れですね。」

「そう、だから、子苑は王将を前に出して一人で戦う方法を選んだ。飯に負けても被害が自分に行くようにして。あなたも冷静ならわかったと思うけど普段の子苑ならこんな闘い方はしないわ。子苑がこうしたのは自分より領民を守る事を優先したのよ。憶測でしかないけど…。それに自分が負けても自分よりうまくやれる人が相手だったから簡単に諦めたのよ」

「なんか、良い感じでお話してますが、そんな大層な話じゃないですよ？」後ろから現れた璃人。

「子苑君！」見事なシンクロ

「あら、子苑、女性の話を盗み聞きなんて紳士のすることじゃなくてよ」

「それに関しては申し訳ないんですけど、夕飯の支度ができたんで呼びに来たんですよ。鯉節のあまりで作ったカツオのたたきですね。鯉節の方はまだ時間がかかりますので、はわわ先輩もう少し待つてくださいね。」

「子苑君それより、大層な話じゃないって言ったけど それって」

「ああ、その話ですか？オレは基本的にさっきの将棋のような状況になったら即逃げます。領地を明け渡し、サッサとしばを巻いて逃げだします。当然相手は選びますが…」

「逃げちゃうんですか！？」あわわ先輩が割って入ってくる

「当然です。他人よりも自分の方が大事ですから。それに、あれは仮の話で実際オレが領地を治める事はありませんので、そもそもありえませんが、仮に有ったとして、あんなった場合、相手が余程の外道じゃない限り明け渡しますね。オレよりはうまくやってくれそうなんで。」

「今回の私でもですか？」

「まあ今回ははわわ先輩にしては強引かなと思いましたが、それでもまともにやり合っても被害が大きくなるのならオレは負けを認めて逃げます。はわわ先輩も勝ちたかったから無理したわけですし、相手がいなくなったらそもそも争う必要はないです。まあ仮定の話なんで聞き流してください」

「……」

「それじゃー晩御飯を「子苑君！」食べ　はい？何ですかはわわ先輩」

「子苑君は今の世界をどう思いますか？」

「なかなか難しい質問ですね。ひと事で言えば酷い　ですかね」

「それが、わかっててなんでそんな事を言うんですか！もし私が酷い人だったら民の人はもつと苦しむんですよ！？」

「だから、仮定の話ですって」

「誤魔化さないでください！」朱里の今までに見たこと無い気迫に少し気押されるも、向こうの世界で生きてきた璃人には大したことはなかった。

「どうしたんですか？急に…いつものはわわ先輩らしくないですよ？」

「……」

「・・・ハア、わかりましたよ。オレは基本善人じゃないんですよ。目の前へで助けを求められれば、可能であるなら助けますが、自分の命を犠牲にしてまで助ける気はありません。オレは英雄ではないんで」

「でも助けられる力があるなら、助けてあげるべきですよ！」

「本気で言ってるんですか？はわわ先輩」

「もちろんです！」

「じゃあ、諸葛亮、お前は力ある者は常に弱き者を守らなければいけないと言っただな？では聞こう、弱き者とは誰だ？」急に話し方が変わり驚く朱里だが、なんとか答える

「力無き民達です」

「では、力無き民達は常に守られ続け、強き武人は常に守り続けな

きやいけないというのだな。戦いたくないやつがいたとしても、力があると言っただけで戦場に立てというんだな？守られるやつは何もしないのか！？」

「そ、それは・・・」

「なら、なぜ力ある領主は力無き領民を守らないのだろうか。オレは、守ってはもらえなかったよ」そう言って璃人は部屋を後にした。戸惑う朱里たちはその背中を見ていることしかできなかった。

.....

朱里視点

「……」璃人の言った最後の言葉の意味を考える朱里、でも何も思いつかない。

「ねえ、朱里ちゃん」親友の雛里が話しかけてくる

「何？雛里ちゃん？」

「子苑君の言った最後の言葉だけど、」

「な、何かわかるの、雛里ちゃん！？」

「たぶんだけど・・・目の事じゃないかな。」

「目？」

「うん。私が森で朱里ちゃん達と逸れちゃったこと覚えてる？」

「当然だよ、心配したものだ。それで、子苑君が助けしてくれたんだよね？」

「う、うん。でもね、あの時は言わなかったけど、子苑君が担いでいた熊がいたよね、あれって子苑君が倒したんだよ」

「ええ！？死体を見つけたんじゃないの！？」

「うん。山を下りる時、私達の前に現れて、急に襲って来たの」

「だ、大丈夫だったの、雛里ちゃん！！」

「うん、子苑君が守ってくれたから。」

「子苑君ってそんなに強いんだ。すごいね。」子供が熊を倒したと聞いて驚く朱里。でも、商人をやつつけた時もすごかったんで当然かなと思ってしまう

「確かにすごいけど、あれはきつとギリギリだったと思う」

「え、でも、あの商人さんをやつつけた時、簡単に倒しちゃったから、それくらいできるんじゃないの？」

「それは違うわ朱里。確かに子苑の動きはあの子の年代では飛びぬけているけど、武官の大人ほどじゃないわ。まだ筋力が足りないか

ら大人相手では厳しいでしょうね。そして、あれ程の大きさの熊を倒すのは訓練された兵士でも辛いわ。一歩間違えば死ぬという状況で戦わなければいけないもの。その点あなた達を助けた時は相手が大人だったと言え訓練も受けてない一商人、それにあなた達を抱えた状態だから後ろから攻撃すれば簡単に倒せたはずよ。事実子苑はやって見せたわ。」

「で、でも」

「それにね、朱里ちゃん、子苑君、熊と戦う前まで震えてたし、怖いって言った。逃げる事もできたらしいけど…」

「さっきの言葉が確かなら、子苑君は雛里ちゃんを抱えて逃げたんだよね？」先程言った璃人の逃げる発言が朱里の頭に残っている。

「うん、できたらしいけど、私が怖くて震えてしがみついちゃったせいで逃げる機会を失ったって言った。口では私を置いて逃げるみたいな事言ってたけど、ずっと熊の方を見て考えているようだった。その時ね」

「その時どうしたの？」

「子苑君の雰囲気が変わったの。さっきみたいに急に。それでね、私が怖くて尻もちついちゃって足手まといになっちゃったんだけど、後ろに下がれてこっち向いて言ってくれたの。あの時手を離れたから逃げれたはずなのに」

「…」さっき言っていた事が実際にはウソだと言う事がわかり暗

くなる朱里

「それで、その時見ちゃったの」

「な、何を？」

「子苑君の目が赤くなってた。」

「赤く？見間違いじゃなくて」

「ううん、それはないと思う。私とその目がきれいで魅入っちゃったくらいだから。」

「それで？」

「外しても恨まないでねって言って熊に弓を構えたの。まだそこま  
で自信がなかったんじゃないかな。それで、熊が接近してきてすぐ  
近くまで迫ったけど、子苑君が弓で射抜いたの。あれはかつこよか  
つたよ」顔を赤くして言う雛里

「それで子苑は熊を抱えていたのね？どうして子供が抱えていたの  
かと思っただけど…それにしても赤い目ね」

「先生何か知っているんですか？」

「ええ、確証はないけど子苑はおそらく、益州の生まれね」

「どうしてですか？」

「益州では古くから風習があって赤目の子は不幸を呼ぶとされてい

るの」

「じゃ、じゃあ、子苑君が一人で旅をしてるのは」

「益州を追い出されたのね。」

「あわわ、そう言えば子苑君初めて会った時どうして山にいらのって聞いたら、放浪？いや旅かかって答えてました。その後修業って言ってたから気にしなかつたんですけど」

「それじゃ、子苑君が言った守ってもらえなかつたと言つのは……」

「そう言う事でしょうね。これであの子があの子の年で一人旅をしているのかがわかつたわ。」

「わ、私」

「行って来なさい。おそらく庭で鍛錬でもしてると思つから。雛里もついて行ってあげなさい」

「はい、行ってきます。」「バタバタと走って出て行き璃人のもとに向かう二人であった。」

.....

璃人視点

別に言う必要はなかったけど言っちゃったな。どうしよう？はわわ先輩がどう思おうと勝手なのに、それを否定するみたいな言い方して、オレ何様だよ」

絶賛反省中の璃人。偉そうなこと言った割には気が弱いやつである。

「子苑君！」「少し息を切らしながら走って来た二人

「何か用ですか？はわわ先輩とあわわ先輩」

「あ、あの、さっきはごめんなさい！」「いきなり頭を下げる朱里

「何の真似ですか？さっきはオレも否定するようなことを言ったからあれですけど、はわわ先輩がどう考えようと先輩の自由ですよ？謝るということは、自分が間違っていると思っただんですか？」

「全部じゃないけど、間違っていると思いました。子苑君の言う通り、戦わなくても良い人を戦場に送りだすのはおかしい事だし、弱いと思っっているから守られているだけじゃ国は良くなっていかない。守るのも守られるのもお互いの事を考えないとただの支配と変わらないと思いました。弱いから守られる、強いから戦う、これって逆に言えばそれ以外何もするなって事になっちゃいますもんね。それでは何も変わらない」

「そこまで考えて言った訳ではないですけど、どんな人にも選ぶ権利って言うのがあると思うんです。だから良い国にとって言うのは選

べる環境を作つてやることだと思ひます。まああれもこれもやりた  
いなんて言うわがままな人が出てきてしまふかもしれないけどね。  
それでも言われた事に従う生き方よりは良いと思ふんです。」

「確かにそうですね。言われた通りの事しかやれないなら、何のた  
めに生まれて来たのかわからなくなつてしまいますから。」

「あわわ先輩、哲学ですね。人はなぜ生まれてきたのか？人類の  
永遠のテーマですね。ちなみにあわわ先輩はどうしてだと思ひます  
？」

「あわわ、そ、それは 愛するためとかでしょうか？」

「愛ですか？随分と乙女な解答ですね。まあ十分乙女なんですけど  
ね。」 離里が照れているのがかなり和む

「子苑君は何でだと思ひますか？」

「ん、聞かれると難しいですね、はわわ先輩。当たり前障りのない回  
答としては死ぬためじゃないですか？」

「死ぬためですか？」

「はい。原因があるから結果がある。始まりがあつて終わりがあ  
る。生まれたからにはいつかは死ぬ。これはすべて同じ事だと思ふん  
ですよ。だから、生まれたからには、どうやって死ぬのかそれを考え  
るのが大事なんだと思ひます」

「どうやって死ぬのか　それは選択するってことですね。」

「はい。自分の死に方、いや生き方でしょうか、これは自分で決めるんです。後悔のないように　オレはそうやって生きたいと思っています」空を見上げながらジンが答える。その光景はどこか悲しいものがあると朱里と雛里は思った。

「それじゃー、益州を出てきたのも自分で選んだ事ですか？」朱里の発言に一瞬ビックリするが、雛里を見て意味がわかった。

「あ、気づいちゃいましたか？あわわ先輩に見られちゃったから遅かれ早かれバレるとは思ってたんですけど、意外と早いですね。まあそうですね、自分で選択したというのは今回は少し違いますが、益州を出た事に後悔はないですよ」

「子苑君が不幸の子って呼ばれるからですか？」

「それは違いますよあわわ先輩。基本臆病なオレでも守りたい人がいるんです。それに約束でもありましたし、だからオレは益州を出たんです。逃げたわけじゃない」璃人の言葉が本物だと言う事がわかるくらいしつかりと聞こえた。

「子苑君、真名を交換しませんか？本当は助けてもらった時から交換したかったですけど」

「はわわ、私もお願いしましゅ」

「急にどうしたんですか？先輩方。まあ構いませんけど」

「私の真名は雛里です」

「私は朱里です」

「まあお二人の真名は知っているんですけどね。オレの真名は璃人って言います。改めてお願いしますね先輩方」

「あわわ、よろしくでしゅ」

「はわわ、お願いしましゅ」

「それじゃ〜晩御飯にしましょうか。」

「はい」そう言って二人と台所に行き、水鏡先生とも真名を交換し、みんなで話しをしながら食事を食べた。その後は各々風呂に入り就寝し、翌朝を迎える。

そこには璃人の姿はなく、璃人の手荷物と武器もなくなっており、手紙が残されているだけだった。



## 第5話 とあるお嬢様との出会い

水鏡塾を旅立って 逃走 して二年ばかりの月日が流れた。今年で14歳、後一年すれば元服である。それで今何をしているかと言うと、類い稀な戦闘力を生かして軍で…働く訳はない。

今は涼州のとある城で料理人として働いている。水鏡塾を出た後荊州を西側に北上し涼州に入った。1年ほど山の中で家を建てて暮らし念能力や基礎体力、弓の鍛錬もした。発に関しては、前の世界とは違うものになろうと思ったけど、なぜかできず能力は変わらなかった。

変化系の能力が三つと緋の目を発動した時のみ使える能力が二つ。キルア曰く、変化系の能力はピスケよりも使えない、ただの容量の無駄使いと言われてしまった。だってしょうがないじゃん！メンチがめっちゃ怖くてこの能力にしないと、後が大変だったんだよ！メンチはと念の修業も一緒でお互いすぐに覚えたのだが、オレが変化系の能力者である事がわかるやいなや、ほぼ強制的にこの能力にされた。断ったら、メンチ愛用の包丁が薄皮一枚のところ投げられるので断れない。

オレの能力はオーラを調味料に変える力と簡易的な冷蔵庫、後は。戦闘には全く使えないし、かつこ悪くて名前さえつけていない。二個目に関しては具現化系に近いが効果が大了たことないので容量をあまり食わず、一個目に関しても同様だ。旅の最中に森や山で生活する事もあり、料理にうるさいメンチにすぐに取り出せる調味料と冷蔵庫が欲しいということで作られたものだ。この世界では別の物になろうと思ったができない。今ではメンチの呪いだとかさえ思っている。死者の念は強力だからな（メンチは死んでない）

そんな悲しい現実には直面したが、逆にこれを利用してこの世界で生きて行けば良いと言う事になり、今ではお城で働いている。この城主様はとてもいい人で日々平穩に暮らしていける。この前初めて会ったのだけど、本当に城主か？と思ってしまったのは仕方がない。

## 回想

「おい、新入り！こっちの皿洗つとけ！それが終わったらそっちのやつだ。早くしろよ、今は昼時で客の入れ時なんだ！もたもたするなよ！」

「はい、おやつさん！」せっせと皿洗いをする。オレがこの町に来て職を探してた時に偶然見つけた料理屋。なんでも、人が辞めてしまつて足りないらしく、ならオレがという事で採用された。ここでオレの仕事は基本朝の仕込みと皿洗い、それとウエイター。メンチに鍛えられてしまつた雑用技術をいかになく発揮している。けどオレが早くやればやるほど仕事が増えて行くのはどう言う事だろうか？

皿洗いも終え今度は店内で注文を取る。そこまで大きい店ではないのだがお客でにぎわっているため、注文を取る必要があるのだ。今の時代、紙なんてもんは高価なので使えないし鉛筆やペンなどもないので覚えるしかない。そして、意外にその能力が高かつたためにこうして注文を取る作業をやらされている。

「お客さん。ご注文をどうぞ」小さなお客さんのようで、普通の服を着ているが明らかに似合っていない。それどころかお姫様のような感じさえする

「へうへうおすすめは何ですか？」なぜか周りをキョロキョロしながら注文を言う。誰か探してるのか？それとも、追われてもいるのだろうか？おそらく後者だと判断した。この子はどこぞの豪族の令嬢で、一般市民にまぎれて家出でもしてきたのだろう。きつと嫌な所にも嫁がされるが我慢できなかったんだろうな。

と勝手にお姫様認定してしまった、女の子から再度質問があった

「へうへうあのおすすめを…」

「ああ、すみませんお客様。おすすめは、麻婆豆腐ですね。特にこの豆腐はおいしいです。」ご注文なさいますか？

「は、はい、じゃあーそれで」

「畏まりました。少々お待ちください」注文をおやつさんに言いに行き、料理ができるまで他の注文を取っている。料理ができたので先程のお嬢さんに渡し、また店内を回っていると騒ぎが起きた

「おい！この店長出て来い！料理に髪の毛が入っているぞ！この店は客に髪の毛を食わせるところなのかあん！？」どこの世界にもいるクレーマー、しかしこの世界のクレーマーはかなり性質が悪く、金を巻き上げようとする

「あの、申し訳ありません！しかし…それは何かの勘違いではないでしょうか？」おやつさんが丁寧な口調で対応する。あっちも文句あんのか？みたいなこと言っているが、あれは絶対におやつさんのではない。それもそうだろう何せおやつさんは

「この通り髪の毛がありませんので」頭に巻いていた布を取り、頭を見せる。まだ30代くらいであろうおやつさんの頭には何も生えてはいなかった。なぜか悲しい空気になる。おやつさんあんた男や！

「じゃあ、その店員の髪の毛だろ！この黒髪！」

「オレ黒髪じゃないんですけど…」イチヤモンをつけられたので布を取り髪を見せる。母親譲りの紫の髪を

「…うるせえ！客が髪が入っているって言うてんだ、お前らは素直に言う事聞いとけば良いんだよ！」

「なにそれ？かつこ悪。その黒髪あんたのでしょ？自分で入れて文句言ってるなんて頭おかしんじゃないの？それとも何、その頭は飾り？そうだったとしたら悪かったわね、考える事が出来ない頭じゃそこまで考えが回らないわね」入口の方から入ってきたメガネっ娘が言いたい事だけ言うて中に入ってしまった。当然、言われた方は激怒する。

「おい、その女！いきなり話に入ってきて言いたい事言いやがっ

て、おめえには関係ねえだろ！」

「そうね、関係ないわ。でも、あんたみたいなやつを見るとイライラするのよ、サツサと出て行ってくれる？目障りだわ」火に油を注ぐような事を チャレンジジャーだな。見て見ぬ振りができないタイプか、勇ましいけど、あれだと

「もう許さねえ！おい、女！ぶっ殺してやる」やめて、刀傷沙汰は片付けるのがめんどくさい。机とかに血がこびり付いたら拭くの大変なんだぞ！やるなら外でやって！

「フン、口で勝てないからって手を出す気？顔だけじゃなくて根性まで腐っているのね？」

「詠ちゃん！危ないよ！」先程のご令嬢がメガネっ娘に飛び付いた。どうやら知り合いらしい

「月、こんな所にいたのね！あれほど勝手に出歩くなって言ったのに、月に何かあったらどうするのよ！」心配してご令嬢に注意するようだが、このタイミングだと…

「ごめんね、詠ちゃん。このお店一度行ってみたくて、人の事無視して話してんじゃねえ！」・・へう」ご令嬢が怖がって、メガネっ娘に飛び付く。というかお姫様、あなた話の仲裁に来たんじゃなかったのですか？余計悪化しますけど

「ちょっと、月を怖がらせないでよ！」

「知るか、人の事を無視して話してるてめえらが悪りい！……お、良く見るとそつちのお嬢さんえらく可愛いじゃねえか？…それにおめえもなかなかの別嬪さんじゃねえか？おめえらがオレ様の相手をしてくれるんなら、許してやっても良いぜ、エっへへへ」

「誰が、あなたなんかの相手をするもんですか！あなたの相手をするくらいなら死んだ方がましよ！」

「なら力づくでやってやるよ！」二人に襲いかかるうとするおっさん

「お客様、お止めください。お代は結構なので、ここら辺でおやっさんが止めに入るが」

「うるせえ！」おやっさんを蹴飛ばし、懐に指してた剣を抜く

「お代は結構じゃねえんだよ！ここにある金全部寄せさせて言うてんだ！ついでにこの嬢ちゃん達も頂いて行く！」

「そ、そんな！」

「逆らうやつはぶつ殺す！」剣を振り回してるから、周りの人も近付けない。というか近付いてない。自分たちには関係のない事だと割り切っているのだろう。まあオレもそう思っていたが問題が発生した。あいつが金を持って行ってしまつと今日のオレの給料が無くなるのでそれは勘弁したい。しかし、剣を持っているやつ相手にするのは怖い。

「止めてください。：わかりました、私があなたの相手をします。だから、他の人達に手を出さないでください。」

「月！」

「大丈夫だよ、詠ちゃん。ちょっと行って話してくるだけだからまあそんなはずないでしょうけど」

「そんなはずないわ。絶対ひどいことされるわ！」

「あんだよ、心外だぜ？気持ちよくしてやるよ！エへへへ」本当に気持ち悪い笑い方をするおっさん。なんか、キメラアントの女王並にキモイ。あれは虫人間だからまだ許せるが、このおっさんは一応人間のはず。あんなオツサンに犯されたら生きていけないだろう。南無、来世で強く生きますように」

「ちよつとそこのあんだ、月を助けて！」

「無理ですね。めっちゃ怖いんですもん。あの人剣なんて持つちゃってます。それにあの顔あれはヤバい人の顔です、主に人間と言う種族に含めるかどうかと言う問題で。あのお嬢さんには失礼ですが、来世で強く生きれる事を願っています」

「あんだ月を見捨てる気？ここの店のために月は」

「それをあなたが言いますか？あなたがあんな風に言わなければもつと穏便に済ませられたかもしれないのに」

「そうかもしれないけど、あんなやつ見逃せつて言つての!？」

「自分で対処できないならそうするしかないでしょう。でないとお友達がああいう目に会います。」お姫様が連れて行かれようとする

「お願い、月を助けて！」泣きそうになりながら懇願する。まあ今回はあのお嬢さんも気の毒だし、何よりこの店のために、ひいてはオレの給料のために頑張ってくれているわけだし、ここは助けるべきか

「これ一回きりですよ。すごく怖いんですから。 やっべマジ行きたくねえんですけど」

「助けてくれるなら早くして！月が連れて行かれちゃう」

「口で言うだけの人は楽でいいですね！後でお礼をもらいますから」「何でもいいから早くして！」その言葉を聞いて駆け出す。相手の男は、お嬢さんに気を取られて、こちらに気づいていない。なので近くに有ったレンゲを手に持ち全力で投げつける。この距離ではずす程ノーコンではないので、見事男の顔面に直撃する。その間にお嬢さんを奪い取り男と距離を取る。ついでに剣はこちらで回収。鼻に当たったらしく鼻血を出しながら転げまわっている。見た目だけでかなりひ弱なやつだ。(璃人は自分で投げつけたレンゲの威力を自覚していない。レンゲをみればわかるが、砕けている。)

手に持った剣をおっさんの顔の横に突き刺しオッサンの動きを止める。お嬢さんはまだ、片手で抱いている。離そうとも思ったが、男

がお嬢さんを狙うとも限らないので一応手の届くところにいて欲しい  
かったからで 他意はない

「まだ、暴れますか？そうなるとこの剣が勝手におじさんの方に倒れる  
コトニナルケド・・・」

「・・・いえ、すみません。」最後の方がカタコトになってしま  
った。これは内心かなりビビっているからである（周りから見れば  
脅してるようにしか見えない）

・  
・  
・

問題を起こした男は縄で縛られ、駆けつけた警備の人に連行されて  
行った。つうかおせーよ！こんだけ騒ぎになって何で気づかねんだ  
よ！おかげでビビっちまったじゃねえか！（心の中では強気な璃人）

「それでは兵士さんお願いしますね」強気なのはあくまで心の中だ  
けだった。

店の片付けも終わったところで、休憩に入ろうとしたら、おやつさ  
んに声を掛けられた

「おい、新入り。お前もう上がって良いぞ。それと、明日から来な  
くていい」

「ええ！？クビですか？」

「んや、なんでも城の料理人の要請がお前に有ってな、お呼びだそ

うだ。さっき兵士の人に来てそう言ってた。」

「なんで、城からなんですか？」

「オレが知るかよ。じゃあな、お前は結構見どころが有ったんだが残念だぜ」

「ちょっと、なんかオレが死ぬみたいな風に言わないでくださいよ。むしろ城で働けるんなら栄転です。もつと祝ってください」

「はいはい、おめでとさん」

「適當すぎる。もういいです、お世話になりました。」

「おお、たまには遊びに来いよ」

おやっさんとの別れも済まし荷物を持って城に向かう。そうするとなぜか王座に案内される。

嘘オレなんか悪い事したっけ？ま、まさか、勝手におやっさんの秘蔵酒を使った事がバレて・・・いや、ないな。たかがおやっさんで城主に呼ばれるなんてありえない。

どうでもいい事を考えていると入室の許可が出て入室する。

やっべ、緊張してきた。無礼を働いたら死刑とか言われたらどうしよう、逃げる準備だけしておこう。

部屋に入ってすぐ辺りを見渡す。両側に小さな窓がありそこから出

たれそつだ。何かされたら速攻で逃げよう。此処は最上階だけどうまく屋根に降りれば大丈夫なはず。いざとなったら堅でガードすればいい。

「ちよつとあんた！何さつきからキョロキョロしてんのよ。」オレの行動があやしく思えたらしい

「すみません。急に城なんて所に呼ばれちゃったもので、緊張しちゃ… あ、メガネっ娘さん！お城の人だったんですね？これでこちらが呼ばれた理由がわかりました。それに 家出したお姫様もこの人だったんですね。」

「誰がメガネっ娘よ！ボクには賈？ 文和って立派な名前があるんだからね！」

「へうへ、家出つて何の事ですか？私は董卓、字を仲頼といいます。先程助けていただいてありがとうございます。」お姫様だと思っていた人は、なんと、城主様だったらしくかなりヤバイ。無礼を働いてしまったから、死刑なんて事も

「いえ、お気になさらず。では、私はこれで！」サツと振り返り来た道を戻ろうとする

「ちよつと、どこ行く気？こつちには話があるって言うてのよ！」

「えへつと、どういったご用件でしょうか？もしかして、無礼を働いたから死刑とかですか？」

「月がそんな事するわけないでしょ！約束した通り、お礼をしたいのよ。あんた料理人なんでしょ？だったら城で働けばいいわ。そこいらの店で働くよりは給金も良いはずよ。どう？」

「え、ホントですか？なんだ、てっきり殺されちゃうのかと思って焦りましたよ。本気で逃げようと思ったじゃないですか。あく良かった。」

「だからさつき、辺りを見回していたのね。呆れた、ここは城の上階よ？窓から出たって死ぬじゃない。」

「そこはなんとか、屋根に降りればいかな〜と申しまして。」

「ハア〜仮に降りられても、城から逃げた時点で追われるわよ。あんた軍相手に逃げ切る気？」

「いや〜ある程度逃げてしまえばもう追ってこないかな〜と思いついて。一庶民を追いまわす暇なんてないでしょうに」

「まあそうだけど。…あんた月を助けた時と全然違うわね。」

「基本的にこっちが本当のオレですね。あの時のオレはどうかしてたんです。」

「…まあいいわ。それでこの城で働くことで良いかしら？月もお礼

したいって言ってるし」

「はい、よろしく願いします。それで厨房の方はどちらに？」

「後で案内させるわ。それよりもあんたの名前聞いてないんだけど？」

「あ、忘れてましたね、オレの名前は黄恩子苑です。よろしく願いしますね」

「こちらこそお願いしますね黄恩さん」

「子苑で結構ですよ。それと城主様にさん付けされるのもあれなので呼び捨てで構いませんよ。」

「じゃあ子苑君と呼びますね。歳も近そうですね。よかったら話し相手になってください」

「仕事外でよろしければ。」

「ちょっと月に言われたんだからもっと嬉しそうにしないでね！月に話しかけて貰えるだけでもすごい事なんだから」

「詠ちゃん言いすぎだよ。子苑君気にしないで話しかけてくださいね？」

「はい、努力します。賈？さんがいない時にでもそうさせてもらいますね」

「それは無理ね。僕と月はいつも一緒だから」胸を張って言うてるがそれはかなり退く。こんな状況だからお姫様も逃げ出したくなつたのだらう。うう、なんて不憫なこみ上げてくる涙を必死にこらえながら賈？の自慢話が始まつた。へうへう恥ずかしいよ詠ちゃんと何度も聞こえたがメガネっ娘の暴走は止まらなかつた。

- - - - - 回想終了

「璃人君今日の料理はなんですか？」

あれからお姫様はよく厨房に現れるようになった。最初は厨房の人が恐縮していたのだが、持ち前の人柄の良さで、今ではすっかり馴染んでいる。それにオレの料理が気に入ってくれたらしく、姫様専属の料理人になってしまった。たびたび話し相手にもなっているのだが、こんな所メガネっ娘に見られたら面倒な事になる。

「姫さん、ここまで来なくてもこちらから持つて行きますよ。」真名はしばらくしてから交換したが、オレは大概姫さんと呼んでいる。最初のイメージが定着してしまつて、ずっとそれからだ。へうへうとか言つて、最初は照れていたが今ではもうすっかり慣れたご様子

「でも、そうすると、璃人君とお話できないでしょ？詠ちゃんももう少し璃人君と仲良くすればいいのに」

「あれは、オレの事が嫌いと言うより姫さんとの時間を取られるのが嫌なだけですよ。愛されてますね、姫さん？」

「へうゝ変な事言わないでください！詠ちゃんは小さい頃から一緒にいるから、ちよつと心配性なだけなんです。」

「あれをちよつとと言える姫さんをマジで尊敬します。」

「まじ？確か本気って意味だったよね？なんで時々璃人君は変な言葉を使うの？」

「ハハ、故郷の方言ですよ。クセが出ちゃうのは仕方ないじゃないですか」ウソは言っていない。もとの世界を故郷と言ってるだけ

「そう言えば、璃人君の故郷ってどこでしたっけ？」

「益州ですね。それで、料理修業の旅に出て今はここにいるわけです」

「ふ〜ん、いつか行ってみたいな〜。その時は案内してくださいね？」

「オレもそんなに詳しいわけじゃないし、案内するような場所はありませんよ。森とかばっかですから。」

「いいんです、璃人君の育った所を見てみたいだけです。それにそこには璃人君の出してくれるような料理がいっぱいあるんですよ？私今までにこんなにおいしい料理食べた事なかったから楽しみです」

姫さんの満面の笑みを見たら、ないとは言えない。以前どうしてこんなに料理ができるのかと聞かれてとっさに故郷で学んだと言って

しまった。これも嘘ではないのだが、益州の事ではないので、そこに行ってもこれと同じ料理があるとは到底思えない。いつかバレてしまっがその時はその時だろう。

「まあいつかですね。オレも帰れるかわからないんで。はい、今日は寿司ですね。その醤油につけて食べてください」

「お寿司ですね、私これ大好きなんです！お魚はこの涼州では鮮度が良くないからあまりおいしくないんですけど、璃人くんが作るとなぜかおいしいんですよ」

当然念を使っているからである。璃人の念の能力『不思議な冷蔵庫』ミステリアス（最近命名）はただ食材を保管するだけじゃなく、鮮度も最高の状態に保つ事が出来る。この能力を作ってからメンチが結婚するか本気で悩んだほどである（丁重に断ったら割と本気で殴られた）

その念能力のおかげで良い魚があまりない涼州でもこうして鮮度のいい料理を出す事が出来る。璃人が今作れる料理は基本和食。魚が欠かせないのでこの能力はかなり良い。キルアには戦闘では役立たずと言われたけど…。後作れるのはカレーとシチューだけ。なぜか洋風な物はこの二つしか作れない。他の物を作ろうとするとかなり不器用になる。これについてはメンチが頭を悩ませていた。

「それじゃー今日は食材を仕入れてくるんで山に行ってきますね。夕ご飯は皆で食べれる物にしたいので鍋なんてどうでしょうか？イノシシが取れたら猪鍋ですね。」

「お鍋ですか？確か璃人君の故郷の料理なんですよ？皆で食べれ

るならそれが良いです。みんなで食べた方がおいしいですもんね。

…それだったら、私もついて行って良いですか？」

「ダメですね」月の懇願をバツサリと切る

「へう〜」

「オレがそんなことしたら賈？さんに殺されちゃうじゃないですか？それに姫さんをあまり危険な所に行かせるわけにはいきませんし」

「だったら詠ちゃんが了承したら良いんですね？」

「いや、その、人の話を 詠ちゃん 行っちゃったよ。随分とアグレッシブだな。賈？さんもオレが来てから姫さんが変わったって言うし、ハア〜」

このまま置いて行こうとも考えたが、下手に一人で来られても拙いので待つ事にする。どうせ賈？さんがそんなこと許すわけないだろう。

「許可もらいました！」にこやかな笑みを浮かべる姫さん。めっちらや可愛い

「なん…だと!？」

「詠ちゃんにお願いしたら許してくれました。私が泣きそうになると詠ちゃん甘くなるんです！」この姫様なかなか策士！賈？さんもきつと断腸の思いだったのだろう

「でも、せめて護衛の人とか……」

「璃人君がいるから大丈夫だよ。詠ちゃんも認めてるし」一度だけどれくらい強いのかという事で戦わされた事がある。無駄な事は嫌いなので猪相手だったが、一発で仕留めた弓術に賈？が舌を巻いた。本気で武官にしようとしたが、それをやったら本気で逃げると言ったので諦めてくれた。姫さんが言ってくれたというのも大きいが

「じゃあ、あまり傍から離れないでくださいね？野生の獣は危険ですから」

「うん。よろしくね、璃人君」こんな笑顔をされたら断れないだろ

## 第6話 約束と旅立ち

今は山の中にいる。城下で食材をそろえても良いのだが、やっぱり猪は新鮮な方がうまい。血抜きに時間がかかるが、それさえクリアしてしまえば美味しい物が食べられる。ついでに鍛錬も兼ねているので一石二鳥だ。

「姫さん、大丈夫ですか？」

「はい、平気です。でも、随分と山奥まできましたね。」

「動物は普段は人に近付かないのでこうした山の奥にいます。それに、これを見てください」地面に有る動物の足跡を指す

「猪の跡ですね。地面の草の具合から見てもさっきここを通ったのでしょう。ほら、オレ達が進んできた跡と似てるじゃないですか」

「ホントだ。璃人君詳しいんだね」

「まあ慣れですね」そんな感じで話しながらも、実は円を展開していたりする。以前よりも拡大した円の大きさは半径50メートル。前の世界のMAXにはまだ及ばないが日々進歩している。

・  
・  
・  
掛った！

「姫さん、ちょっと静かにしてくださいね？この先に猪がいるんで」

「う、うん」どうして分かったのか気になっているようだが、璃人の言う事を聞いて静かにする。一方、璃人の方は弓を構え、猪が視界に入るのを待つ。……来た！

「疾！」力強く弾いた弦を離す。弓と矢は周で強化しているためかなりの威力と速さを誇る。一瞬で猪に突き刺さり、命を奪う。月の方もその洗練された弓術に目を奪われていた。

「終わりましたよ、姫さん。川によって血抜きをして、山菜を採ったら帰りましょう」

「う、うん。やっぱり璃人君の弓はすごいね、私のだとあんな風にならないもん。（へうへう璃人君の弓を射る姿がこよかったよ）」

「むしろ、姫さんがこれ出来たら引きますけどね。姫さんの仕事は別に有るんですから気にしないで良いと思いますよ。それより川の方に行くんで気をつけてくださいね。滑って川にでも落ちたら大変ですから」

「へうへう、私そんなドジじゃありません！それでも弓術と馬術は褒められるんです。華雄さんも褒めてくれたんですよ。」

「ああ、華雄さん、華雄さんね。オレあの人苦手なんですよ。自分の事最強とか言ってますけど、張遼さんとか呂布さんに軽く負けるじゃないですか、その後ヤケ酒に来るんですけど、絡み方が本気でめんどくさいんです」

「へう〜、華雄さんは良い人なんですけど、ちょっと思い込みが激しい所がありました」「フォローしようとするができません月。」

「まあ武將に褒められるくらいじゃなきゃ、こんな山奥まで登ってきて平気な顔なんてできないですもんね。姫さんなかなか行動力ありますよね〜。へう〜とか言ってると思像できないんですけど」

「へう〜、からかわないでください!」

「すみません、へう〜」と笑いながら川の方に降りて行き、月は怒りながらも後をついて行つた。基本二人の時はこんな感じでお互いに気を使っていない。出会ってからはその日に日が経つてないけど、かなり仲の良い二人であつた。それに嫉妬して賈?が怒るのはいつもの話

-----

川で猪の血を抜いて臓器を洗い『不思議な冷蔵庫』ミステリアスに入れる。月はなんでこんな所にそんな箱があるのか不思議に思ったが、璃人が故郷ではこういう手品ができるんですと言つた事を信じて気にしてない。月にはこのままできて欲しい。

「それじゃー帰りながら山菜でも摘んで行きましょうか。姫さんも手伝つてくれます?」

「はい」

ガサガサ。草むらの方から物音がする

「姫さん、非常事態だ。オレの傍を離れないでくれ」音が聞こえた瞬間、円を発動し辺りを調べた。そして反応があった。20人以上の人の反応が…

「どうしたんですか？」

「おそらく山賊です。数が結構いますので、逃げる事をお勧めしますが。どうしますか？」

「そうしましょう。この先を行けば広い所に出られる筈です」

「一回しか来てない山の事を良く覚えてますね。さすがです」

「へう〜」照れている月を抱えて走る。賊の一団とは逆方向に逃げやり過ごしてから帰ろうとしたが、今日は運が悪いらしい。

「なんだ坊主。そんなに急いで、こっちになんか用か？へッへ〜」  
逃げる事に注意が言っつて円を解除してしまったことが裏目にでた。  
賊の一団はまだいた。しかも、明らかにこちらを狙っているような様子だ。

「ええつと、今から帰るところなんですよ。皆さま方も忙しいでしょうから、こちらに気にせず、どうぞ行ってください」

「まあそう連れねえ事言っつなよ坊主。お前とそこのお嬢さんにはちよつと聞いてい事があつてよ〜」

「ええっと、残念ながらあなた達のような人たちに聞かれるような事はないと思うんですけど…」

「いや、知ってるはずだぜ。何せ、お前がオレの可愛い弟を捕まえたんだからな！そのせいで弟は」

「あの〜弟さんって料理屋で問題を起こしちゃった人ですか？」

「ああ、お前が倒した奴だよ。今頃弟は辛い目に有っている。この落とし前、どうつける気だ？」

「あれは、あの人の自業自得な気がするんですけど。って言うても聞いてくれないですよね〜」

「当たり前だ！」

「じゃあ、この子は関係ないんで見逃してもらえますか？」

「そりゃーだめだな。そこのお嬢さんはかなりの上物だからな、後でオレ達が可愛がってやるから安心して死んでけ！」前までの璃人ならこの状況なら迷わず逃げるが、さすがに月をおいて逃げる気はない。

「ハア〜そう言われちゃうとこっちも本気で行くしかありませんね。姫さんその壁を背にして一步も動かないでください。左右に気を配って誰か来たら叫んでください。すぐに助けます」

「で、でも、璃人君…」

「どの道やらなきや死んじやいますから。姫さんはそこでジッとしててください。それとこれを持っていてください」

「これって璃人君の弓…」

「大切なものなので失くさないでくださいね？」

震える月に弓を渡して敵を見る。ざっと50人、先程の倍以上。

「お別れは済んだか？じゃあもう良いよな？」

「あなたたちこそ良いんですか？手加減できませんよ？」

「フン。行け！」部下であろう二人組が襲いかかってくる。

「遅せえ！」襲って来た二人の剣を奪い切り捨てる。璃人はクラピカ同様クルタ二刀流が使える

「て、てめえ！」

「これから始まるのは一方的な虐殺だ。大事な姫を傷つけようとしたんだ。お前らに死ぬ以外の道はないと思え。」

「う、うるせえ！かかれ！相手は一人だ取り囲んでやっちまえ！」  
おお！と集団でやってくる。しかし、一人一人がバラバラでただ向かってくるだけ。そんな奴に負けるような鍛錬はしてない

「疾！」掛け声とともに向かって来た男の首をはねる。動揺して後ろで止まっているやつも返しの剣で同様に刎ねた。相手もこちらの技量を察したのか今度は一斉にかかってくる。しかし、この程度の相手なら一斉にかかってくるに慣れてくれた方が楽なのだ。

「4、5人まとめてかかって来い。その方が楽でいい」先に向かって来た3人を斬り飛ばして言う

「なめんじゃねえ！」

「甘いな」かかってきたやつらを片っ端から斬り伏せる。さらに、斬り伏せて足場の邪魔になった者は蹴りあげて相手に飛ばす。相手がひるんだところをすかさず斬りつける。それを繰り返して、あっという間に相手が残り5人までになった。

「おい、弓だ。あいつはあそこから動かない。弓であいつを狙え！」  
一斉に弓が飛んでくる。しかし、前の世界で弾丸を相手にしていた璃人からすればこんなの余裕で防げる。月が後ろにいたので避けずに全て斬り落とす。さすがに、剣の方が安物なので周を使ってももたず先の方から砕けた。

「よし、野郎は武器を失った。今だ一斉に」  
「放てという前に

何か風を切るのを感じた。男がふと横を見ると自分の部下の顔に折れた剣が突き刺さっている。そう璃人が投げた剣が

「武器ならここにくらでもあるぜ！」そう言って地面に転がっている剣を投げつけ部下たちの命を奪って行く

「残るはお前だけだ」

「ひいいい、た、助けてくれ」命乞いをしているが

「無理だな」一刀で切り捨てた。璃人は切り捨てた剣を捨て、月のもとに戻る

「ごめんな、怖い思いをさせちゃった」

「り、璃人君、そ、その目」

「ああ、これはオレがここにいる理由だ。オレの故郷の益州では赤目が不吉のものとされていてな、それで州を追い出されちゃった。気持ち悪いだろ？　…それに、この目になると性格が変わるんです。すみません、姫さんにこのような物を見せるつもりはなかったんですが　軽蔑してくれてかまいませんよ」緋の目を解除し急に口調が戻る

「そ、そんなことない！その目は綺麗だと思うし、軽蔑なんてしないよ！私は守るためにしてくれたんだもん！」その月の言葉が今は何よりもうれしい

「帰ろう、璃人君。そして美味しい料理を作って！」満面の笑みを浮かべながら手を差し出す月

「…フフ、姫の仰せのままに」ちよつと気障っぽく言ってみた。月も少し照れながらも二人で手をつないで帰った。

-----

城に帰った後は鍋パーティー。呂布さんの食事が半端なく大きめの猪が軽く食べられてしまった。一応20人前で作ったはずなのに、あの人のお腹の中に10人前は持ってかれた。最初に確保しておいてよかった。

一料理人であるおれが將軍たちとの食事の場にいるのは月のせいである。どうせなら一緒に食べようというので了承した。オレの隣で食べる姫さんを見た賈馱さんの嫉妬の眼が怖かった。視線で人が殺せるなら、何回死んでいただろうか？

それに張遼さんの絡みもめんどくさい。オレの作った酒を気に入らなくやたら絡んでくる。必殺姫さんガードを使わなかったら、

ずっと絡まれ続けていただろう。

食事が終わって、賈馱さんの話が始まる

「ちょっと皆に聞いて欲しい事があるの」「料理人でしかないオレがいる状況で話していいのだろうか？」

「都の何進から都に上がるよう言われたわ。朝廷は今いろいろ大変な事になっていて、私達の軍に目を付けた何進が私達を味方につけようとしている。断れば、即逆賊扱いになってしまう。私は月を守るからついて行くけど、この決定に不服で軍を出たいと言うものは止めないわ。」「賈馱さんが辺りを見渡し、誰も抜けようとはしない。それだけ、月が慕われているのだろう。」

「あの～使用人の方はどうなるの？」「自分の処遇を聞くために質問する

「一応一緒に行く事になっているけど、そっちの方も個人に任せるわ。都に行けば危険な事も増えるかもしれない。軍人でない人の身を守ることは難しいかもしれない。下手にあちら側の機嫌を損ねるような事があれば、殺されたっておかしくないもの。」「

「え～じゃあ、私は辞めさせてもらいます」

「ええ？」一番驚いたのは隣にいる月

「基本的に危ない所には行きたくないの、姫さん、すみません」

「う、うん。璃人君が決めた事だから」「悲しそうな顔をする月

「でも、姫さんが危なくなるような事があつたら必ず駆けつける。オレに何か出来るわけじゃないけれど、必ず駆けつける。だから、また会いましょう」

「うん。また会おうね」月の涙が、目に焼き付いて離れなかった。月を泣かせた事で賈馱さんがキレ出したがそんな事が気にならないくらい、月の涙は綺麗だった。

.....

仕事場の人や、知り合いの將軍たちと別れを済ませ、旅立つことにする。別れ際に再会を約束して月に神字が書かれている紐を渡した。

「月が危ないと感じたらオレにわかるようになっていから、どうしても困ってどうしようもない時はその紐に念じればオレが駆け付けるだから大事に持つといて欲しい。」そういうと月が少し顔を赤くして頷く。大切にするという月の言葉に安心して旅立って行った。

.....

涼州を出て今は？州の陳留の近くにいます。山で食料を調達し、それ

を近くの村で売り日々の生活の糧としている。涼州を出てから足を止めて生活するような事はなかったが、ここ陳留は比較的治安もよく、ここなら平和に暮らせるかなと

「思ってた時もありました、はい」

「何を急に言っただやがる！サッサと金目のもん出さねえとぶっ殺すぞ！」

「そうなんだな、その後ろに背負ってる弓を置いて行くんだな」

「そいつはなかなか高く売れそうですね、兄貴」ヒゲ、デブ、チビの三人に璃人は絡まれた

「ということ、さよなら」三人に目もくれず逃げる。

「待ちやがれ！」追ってくる三人だが、追いつかれるような脚力はない。グングン引き離すが、目の前に二人の女性がいた。嘘！？ここにいたら、あいつらに出くわしてしまうじゃないか！オレの知らない所ならいざ知らず、オレが逃げてきたせいでこの二人が襲われるのは忍びない

「なぜ、こんな所に御二人はいるんでしょうか？後ろから賊が追ってくるので早く逃げた方が良いでしょう」とりあえず、注意して見るが

「グう」頭に変な人形を乗せた子は寝たようだ。

「お疲れのようだし、死にたいみたいなんで、この子は置いて逃げ

ましようか？」メガネを掛けた女性に尋ねる

「コラ、風寝るな！それに、あなたのもとには星殿が向かった筈なのにどうしてここへ？」

「お知り合いですか？そんな人いませんでしたけど…ああ、追いつかれちゃったよ！」後ろから追って来た賊に追いつかれてしまった。

「お兄さん、風達の事は気にせず逃げてください。おそらく星ちゃんもそろそろ来ると思っているので大丈夫ですよ」

「ホントですか？では、お言葉に甘えて…」

「おいおい、こんなか弱い子を置いて逃げてくなんてお前本当に男か？」

「これこれ、宝？、そんな事は言うてはいけませんよ。さ、お兄さんお気になさらず」

「じゃあ、さよなら」振り向いて逃げようとするが、人形を頭に乗せた子に服を掴まれた

「離してください。気にしなくても良いのでしょうか？」

「そこは、言葉の裏を呼んでもらいたいものです。女の子二人を見捨てるおつもりですか？」

「さっきからコツチを無視してんじゃねー！誰も逃がすわけないだ

ろうが！その男は金目の物を持ってそうだし、そつちの二人にはオレ達の相手をしてもらおうか。エッへへへ」なかなか汚い笑い方だが前に見たやつよりはマシだな。

「それじゃ。ごゆっくりどうぞ。あ、金目の物は持ってないんで、オレはこれで失礼しますね、では！ ……離してください」まだ先程の女の子に掴まれている

「お兄さんは、風達がこの人たちに酷い目にあわされても良いと言うんですか？お兄さん、人でなしですね。ああ、風達は、ここでひどい事をされて殺されてしまっんですね」

「そうですね、残念です。しかし、見ず知らずの人のために命を掛けるなんて真似はできませんので、すみません。それと、その芝居やめてください」若干イライラしながら言う

「すみませんお兄さん。助けてもらえないでしょうか？」こちらの意図がわかったのか先程の女の子が頭を下げてきた

「ハア、そこで引かずに押してくださいよ。そう言われたら助けないといけないじゃないですか。かなり怖いんですけど仕方ありませんね。よいしょっと」背負っていた荷物を下ろし構える。まあ実際の所、この程度の連中なら何の苦もなく倒せるが、この女の子の芝居がかった演技が少しイラっときたので、逃げるふりをしてみただけ

「武器を置いてしまつていいのか？こつちは三人だけ？降参した方が身のためだぜ？」ちよつと強めに言つてゐるが若干腰が引けている。おそらく人を襲つた事のないもと農民だろう

「でも、退いたつて殺されちゃうなら、やるしかないじゃないですか？それにその剣拾いものでしょ？刃毀れがひどくてそんなもんじや切れませんか？」

「う、うるせ！チビ、デク、やつちまえ！」

「わかつたんだな」「へい兄貴」そういつて突つ込んでくるが

「足元がお留守ですよ？」突つ込んできたチビの足を払い空中に浮かせ

「そいや！」腹に蹴りをぶち込む。念は使つてないが、軽かつたためデブ方にぶつかった。ぶつかったデブはいきなりの事で反応できず地面に倒れる。そこを見逃さず追撃を掛ける

「とりあえず、寝てください」倒れたデブの顎を軽く蹴り意識を刈り取る。チビの方は先程の蹴りで気絶したようだ

「後はあなただけですな？」そういつてトドメを刺そうとするが

「待て待てえい！か弱き女性達を襲う賊ども、この常山の昇り竜。趙子龍がお相手いたす。覚悟せい！」ああ、これでオレの役目も終わりか、もつと早く出てきて欲しかったなと思ひながら一息つこう

とするが

「せい！」なぜか、こちらを襲って来た。

「何故に！？ウおおい」ギリギリでかわし態勢を整える

「ん？賊にはなかなかやるじゃないか。だがこれなら！」槍を払いから突きに移行。しかも、その突きが半端なく速い

「おお！あぶない ってば！」全ての突きをかわしたが若干掠つてしまい服が破けてしまう。ああ、替えの服少ないのに

「やはり、他の賊とは違うな。ならこちらも全力で「星ちゃん」なんだ風。危ないから下がっている。「そのお兄さんは賊ではありませんよ。」何？なら賊はどこへ？」

「あなたのせいで逃げられましたよ。その御仁が倒した二人を連れて」メガネを掛けた女性が割って入る

「……すまない。てつきり風達が襲われているものと勘違いして腰を抜かして倒れているやつを見たからそっちの方が襲われた方だと勘違いしてしまった」微妙な空気になってしまい、深々と頭を下げる星

「非難の目を向ける璃人

「うっ、すまぬ」そんな璃人の視線に耐えられず先ほどよりも深く頭を下げる

「良くはないですけど、勘違いなら仕方ありませんね。これからは“くれぐれ”も気をつけてください。」

「わかった。風達を助けてくれた御仁に刃を向けてしまうなど、この趙子龍一生の不覚。」

「お兄さんありがとうございます。風の名前は程立というのですよ。」

「私は戯志才と申します。私からも礼を言います。助けてくれてありがとうございます。」

「では私も改めて、私は趙子龍という。先程は本当に申し訳なかった。」

「オレは黄子苑と言います。ケガがなくて良かったです。」

「それにしてもお兄さんお強いですね。なぜ最初は逃げていたのですか？」程立の間延びした口調が気になるが、一応答える

「戦うのが嫌だからです。危ないじゃないですか」

「私も気になったが子苑殿はなかなか武を持っているのに、危ないとは？最初あなたが襲われている時に助けに入ろうと先回りをしました。あなたが逆方向へ逃げてしまったため、助けに行けなかった。稟や風の方向に逃げて焦りましたが、来てみればあなたが賊を圧倒している、だから襲っている人が賊だと思った訳ですが」

それほどの武を持ちながら一体なぜ？」

「買いかぶりですよ。オレは臆病な弱者ですね。今回はたまたまです。危ない事には関わらないようにしてるんです」

「謙遜しなくてもいい。貴殿は相当強いとお見受け出来る。どうか  
な？一手私と打ち合ってもらえませぬか？」挑戦的な笑みを浮かべ  
誘ってくる趙雲

「嫌ですよ。無駄な戦いなんてしたくないですし、勝てそうにもない  
いで……」

「やってみないとわからんではないか？立派な弓も持っているよう  
だし」

「あ、あれは基本狩りに使うものなので、戦いには使いません。」

「ム・ムム、仕方ないこの手は使いたくなかったが」「徐に雰  
囲気が変わる

「無理やりしようとしても逃げますよ？足ならオレの方が早そう  
ですし、二人を置いて行くわけにはいかないでしょう？」

「そんな事はせんよ。なあ、子苑殿賭けをしないか？勝ったら、私  
秘伝のこのメンマを進呈しよう」「メンマの瓶をどこから出したのか、  
出してきて宣言する

「いいりません、なぜメンマなんですか？」

「ム、貴殿はメンマの良さがわかっていないようだな？いいかメンマと言うのは」  
「メンマの事について熱く語るうとする趙雲。ああ、メンチと同じタイプだ。こういう人はめんどくさい事この上ない」

「程立さん、止めてもらえませんか？」

「無理ですね、ああなつた星ちゃんを止めるのは私では不可能なのですよ。凵ちゃんはどうぞです？」

「私も無理ですね」メガネをクイツと上げながら答える

「仕方ないですね ではこれを」璃人も徐にメンマと書かれた瓶を取り出す。璃人の場合は能力で取り出したのだが…

「んんん！？それは…」熱弁していた趙雲がいったん止まりこちらを凝視する。

「これはオレが作った特製メンマです。どうです、欲しいですか？」

「た、頼む！譲ってくれ！」

「なら、勝負は無しと言うことでもいいですか？」

「ムムム……それは…」

「じゃああげられませんね」

「…わかった、勝負は諦めよう」かなりの葛藤が有ったようだが勝負は諦めてくれた

「二言はないですね？」

「私の真名に誓って約束しよう。だから…」

「ではどうぞ」「そう言って瓶を渡し、趙雲がすごく嬉しそうな顔をする

「では、早速」「趙雲がメンマを食べようとするが

「子苑殿これは一体どういう事ですか？」趙雲の顔が少し怒っている

「何か問題でも？」

「問題？…なぜこれだけの大きさの瓶なのにこれぽつちしかメンマが入っていないのだ！」趙雲が中身を見せ叫ぶ。中に入っていたのは数枚のメンマ

「そんなのオレが使ったからに決まってるじゃないですか。確認しなかったあなたが悪い。それにちゃんとメンマが入っているですから問題はないはずですよ？それとも撤回しますか？真名にまで誓った事を。まさか…」

「うう、て、撤回・・・などせん。確かに私の責任だ。ク、こんな  
においしそうなメンマがこれだけしかないとは」

「まあ、それは試作品ですから、感想を聞かせてくれるとありがたい  
ですけど」

「なんと!?!?こんなにおいしそうなのに、試作品とな。ならば、メ  
ンマ愛好家としてしっかりと評価してしんぜよう」そう言ってメン  
マを口に運ぶ…食べた瞬間、趙雲の動きが止まった

「美味しくなかったですか?」不安になって聞いてみたが反応がない

「もしもし」顔の前で手を振ってみるが反応がない

「気絶しているようですね。お兄さんのメンマがあまりにも美味し  
かったのでしょうか」

「うそ、そんなで気絶する人がいるの?この人どうしよう!..」

気絶した趙雲をどう扱っていいかわからなかった。

## 第7話 傍観しようと思ったけど出来ませんでした。

気絶した趙雲を無視して立ち去ろうとしたが

「お願いします。星ちゃんを運ぶのを手伝ってくださいませんか？」先程の教訓から、変な芝居はせず、素直に頼んでくる程立

「近くの村までですよ？」しびしび了承し、背中に背負っていた弓を手で持ち趙雲を背負う。背的にはこちらの方が高いので、問題なく背負う事が出来た。途中星ちゃんの胸は気持ちいいですか？とバカな事を聞いてきた程立に

「ええ、危づく落としそうになるくらいには。おおっと・・・危ない」趙雲を落とすふりをする。前の世界でメンチにパシられたために、女性をおぶることぐらい問題ない。メンチなんか楽するために人の上にすぐ乗って来やがるし

璃人の様子に慌てて謝罪する程立。からかったつもりで、友人が落とされるのは申し訳ない。横でメガネをクイツと上げる戯志才は夕メ息をつくばかりであった。

しばらくして村に到着して趙雲を休ませる。ここらでお別れしようかと思ったが、

「この近くに賊がいるようです。当たりの村が最近襲われているようです」戯志才がどこからか情報を仕入れてきた

「それならここのお偉いさんに任せましょう。確か…」

「曹操殿ですね。この辺りを治めている方は。」

「ああ、その人です。ここら辺の村でも評判が良いのでおそらく賊を鎮圧してくれるでしょう。」決して自分でやるとは言わない

「そのようなことではイケませんぞ！か弱き民を守るため、私らと共に賊を征伐してやるうではありませぬか」いつの間にか起きていた趙雲が話に入ってくる

「そうですか、頑張ってください。それじゃ、オレはこれで」荷物を取って立ち去ろうとするが

「ム、お主は戦ってはくれんのか？」趙雲が少し不機嫌そうな顔で言う

「はい、先ほども言いましたが見ず知らずの人のために命を懸ける気なんてありませんよ。弱き民が守られて当然だと言うのなら、それを言ってる人が助ければ良い。強者が必ずしも弱者を助けなければならぬ理由なんてないんですけどね。オレは弱者側なので関係ありませんが」

「……まあ無理強いはすまい。しかし、貴殿と共に戦ってみたかったものだ」少し残念そうだが他の人と違い、無理強いで来なかったので趙雲の評価はウナギ登りだ

「では、頑張ってください。健闘を祈ります。」そう言ってその場

から去って行った。

・  
・  
・  
・

程なくして趙雲一行は村で志願兵を募り、当たりの村でも募集した。相手の賊の人数は把握しきれないが、そこまで多くはないと予想される。星と軍師二人がいればなんとでもなるであろう人数だ。

「それにしても良かったのですか？今は一人でも戦える者が多い方が良いのでは？」稟が星に尋ねる

「ん？ああ、確かに、戦える者が多い方が良いが、あの御仁は戦う事があまり好きではなさそうだから、無理強いさせても仕方あるまい。たとえ賊とは言え、命の危険があるのだから、命を懸けるとは言えまい。それに強者が弱者を守る、あの御仁の言葉が今でも心に残っている。今までなら、何の疑問も持たなかったが、確かに変だな」

「守られる側が何もしないと言っ事ですか」

「そうだな、風。先程も兵を募ったが結果は芳しくなかった。後で軍が来てくれるからオレ達はいいと言って集まらなかったな。」

「でも、それは仕方がないのではありませんか？戦うことが怖いと言っ人もいるでしょうし、何より彼らは農民です。税金を納めているのですから軍に任せるのは当然でしょう」もっともな事を言っ稟

「確かに、そうだが、我らが討伐を提案した時の村の様子はどうだった？皆が自分たちの事なのに関係ないと言わんばかりの顔をしていたぞ。……これがこの国の現状だ」

「そうですね、助けてもらふ事は当たり前、守ってもらふ事が当たり前、そう言った考えが広まっているのは確かです。」

「別にそれは悪いことではないと思う。だが民を守るのは軍であつて強者ではない。守りたいなら軍で働けばいい。それ以外のやつに求めるなと子苑殿には言われたような気がしたな」星が子苑の言葉を思い出すように言った。

「私は少し違いますね、お兄さんは選択するのが自由だと言つたような気がします。戦つのも守られるのもどちらを選ぶのも本人の意思だと言っているような気がしました。」

「そうですね？私には戦う事が怖いからあんな事を言つたように聞こえましたけど……ただ逃げてるだけじゃないですか？」

### 三者三様の意見

「確かにそう言う面もあるでしょうけど、風や稟ちゃんや星ちゃんと違って軍師ですからね。前線で戦う兵士よりは命の危険が少ないです。風もお兄さんに助けるように促した発言をしますが、あれは今考えれば酷いこと言つたと思います。いくらお兄さんが強いと言つても、命の危険がないわけではないのですから。口で言ってるだけの私達がどうこう言える事ではないと思つんですよ。星ちゃんならわかるでしょうけど」

「うう、確かにそうですね。私達の策は戦に勝つためのものではあるけれど、それを実行するのは最前線にいる兵士たち。成功したとしても、命が失われる可能性があるのだから、私達に比べれば大変な事です」稟も少し思う所が有ったのか考えているようである

「私としてはどっちもどっちな気がするがな。軍師がいなくては兵が活きず、軍師がいても兵がいなければ軍師が活きない。どちらが良いというよりもどちらも大事なだろう。まあ命の危険があるだけ兵士の方が優遇されてもおかしくないと思うがな。これは国の問題だから今考えてもどうしようもあるまい」

「そうですね、今は賊の事を考えましょう。…この先に賊が住みついている村があります。最近襲った村を占拠したのでしよう。数は多くて200ぐらいでしょうか？こちらの義勇兵は20人程。星殿やれますか？あなたへの負担がかなり大きくなってしまいますが」

「問題ない、私一人でも十分なくらいだ」所詮賊だろうと余裕を見せる星

「星ちゃん無理だけはしないでくださいね？今回は風達はほとんどやれる事がないので、遠めからの弓を指揮するくらいしかできませんから。」心配しそうな顔で星に念を押す風。

「心配するな風。たかが賊に後れをとるほどこの超子龍、軟弱にはできておらんぞ。風達は安心して待っていてくれればいい」

少し不安な風だがわかりました」と言っつてその場はおさめた。

-----

賊の本拠地としている廃村。辺りには死体が転がっている。おそろく逃げ遅れた村人の死体があるままになっているのだろう。この光景を見て星達は唇を噛むのだった。義勇兵として志願した人達も手に力を込めている。その怒りを抑えて作戦会議に入る

「まずは、火矢で相手の動揺を誘い、相手が混乱して出てきたら一斉に弓で攻撃。討ちもらしを星さんが叩くと言つ事であるらしいですか？」

「ああ、この趙子龍の槍で賊どもを成敗して見せよう」星が自信満々に言つが

「風、何か気になる点でもあるのですか？」風の様子がおかしいと稟が尋ねる

「村の出口はこちら側しかなくて向こうは岩で仕切られています。だから、こちら側に逃げてくるのは確実なんですけど、大人数が入口に押し寄せたとすると、いくら星ちゃんでも無理じゃないかと思つのですよ」

「何を言つ風。賊の1000や2000私一人で叩けるぞ」

「確かにそうですが、ここは平地ではなく、一本道になります。最初はいいでしょうが、追いつめられてた賊が突っ込んできたら、捌き切れないと思うのですよ」

「ん〜確かに風の言う通りかもしれない。星さんが途中で立ちふさがったとしても、突破される恐れがあるし、星さんが囲まれたら…」  
最悪の状況を考える稟。

「稟、心配するな。私が賊に後れをとると思うのか？お前たちは、弓の指揮を頼むぞ。後は私に任せろ」そのまま歩いて行ってしまった星。二人の軍師も不安があるのだが、星が行ってしまったため作戦を実行するしかなかった。

・  
・  
・  
・

火矢が村の中に放たれる。何十本もの火矢が村に飛び、辺りの建物を焼いて行く。それに焦った賊たちが、一斉に逃げだし、こちらの思惑通り一本道の方に逃げ出してきた。予想通りの展開なので稟が弓兵に指揮をする。弓自体は素人だが、相手は大人数で来てるのでどこに打つても当たるようになっていた。賊が次々と倒され、弓から逃れた賊を星が倒して行く。最初は風の予想通り順調だったが

「クソ、数が多くて動きがバラバラ、なかなかやり辛い。ハアアア！」近くにいた賊を斬り飛ばすが、一向に数が減らない。200と予想していたが明らかにそれを超えている。見誤ったと後悔しながらも賊を斬り飛ばして行く

「死体が邪魔で思うように動けん。それに、相手も何も考えずに突っ込んできている。これでは……」風が懸念していた事が実際に起ってしまった

「死ねや!!」先程通り過ぎた男が反転しこちらを襲って来た。普段なら余裕でかわせるが、今は死体で足を取られかわせない。とっさに槍で防いだが、今度は前方から、攻撃される。バランスを崩していたため防げない

「(クツ、これまでか)」と諦めかけたその時

「くわあ!」今まさにトドメを刺そうとしていた男の眉間に弓矢が刺さる

「なんだ? 一体どうしたんだ!？」賊たちが一斉に騒ぎ出した。その間も次々と射られていく賊。星の周りにいた賊は全て射られた

「(義勇兵達か? いや、この精度は義勇兵のものではない。なら、誰が? ……!)」考えた結果一人だけ思いついた。この状況でこれだけの矢を射れる者を。確かに彼は弓を持っていた。

「感謝しますぞ! これなら、存分に戦える!」態勢を立て直した星が賊に突っ込む。それを見ていた稟が叫ぶが星は止まらない。星は自分の眼前に見える敵をすべて倒して行く。当然こうなれば、後ろに賊が行ってしまうが、稟たちが賊に襲われることはなかった。星を通り過ぎた賊は全て心臓が眉間を射られ絶命していく

どうしてこのような状況になっているかわからない稟だが、これは好機と、星に当たらないように弓を射させる。一刻もしないうちに全ての賊が始末された。

- - - - -

賊の始末が終わり、死体は義勇兵に任せて、いったん先程の村に戻り、目的の人物を探す星達。まだどこかにいるだろうと思いつけず探そうとしたが、意外にもあっさり見つかった。目的の人物はのん気に昼食を食べている。おそらく自分で用意したのだろう、使われた食器が重ねられていた

「子苑殿、先程の助力誠に感謝する。おかげで命拾いした」星が頭を下げ、風や稟もそれに続く

「星殿から聞いておりましたが、本当にありがとうございます」

「お兄さん、星ちゃんを助けてくれてありがとうございますよ」

「まあどっかの誰かさんが無茶するのが山の上から見えてしまっています。見てしまったのなら、見過ごすのもあれかなと思ったままですよ。今回はたまたまです」

「おや、てつきり否定してくると思ったが」

「否定しても変わらないなら受け入れた方が楽ですからね。まあご無事なようで何よりです。なかなか勇ましい戦いぶりでしたね」ち

よつと皮肉っぽく言う

「うう、私としては大丈夫だと思っていたのですが、いやはや、まだまだ、未熟でしたな。自分を過信するなど」「反省している星

「それでも十分すごかったんですけどね。平地で戦っていれば、倍いたとしても一人で勝てそうな武でしたよ。」

「それを言えば、貴殿こそ素晴らしい弓術をお持ちのようで。あれほどの弓の精度はなかなかお目にかかれない。それに山から見えたと言っておられたが、かなりの距離が有ったはず。それを感じさせない程の腕、感嘆の声しかでませんな」

「オレは趙雲さんと違って遠くからこつそり狙うのが得意なだけですよ」

なんかお互いを褒め合っているような空気になってしまい、あれなので、璃人は星達を昼食に誘った。星達もそれを了承し今は皆でそれを食べている。星達はその料理の腕前に感嘆し、結構なペースで消費していく。メンマが有れば最高なのに…と星がつぶやいたのが聞こえたが、スルーする事にする

食事を終えて、一息ついた時星が急に話を切り出す

「子苑殿、先程も言ったが、此度の件、誠に感謝する。あなたがいなければこうして皆とこのように食事など出来ていなかったかもしれない。こちらとしては返せる物が有れば良いのだが、いかんせんそれも無い。だから、私の真名を受け取ってはもらえないだろうか

？恩人に渡せる物など今はこれしかないのではな

「構いませんよ、そこまで気にしなくても。オレに被害が有ったわけではないので」

「そうだとしても、恩人に真名を預けないなど趙子龍一生の恥。此処は受け入れてもらえないだろうか？」

「そこまで言われたら断りませんが」

「なら、風の真名も受け取ってください。お兄さんには助けてもらった恩もありますし」

「そうですね、私もあなたに助けてもらった事ですし、私の真名も受け取ってください」風と稟が星に続く

「わかりました。」

「では、私は性を趙、名を雲、字を子龍、真名を星と申す。」

「風は、程立、真名を風と言つのですよ。」

「先程は偽名を名乗ってしまって申し訳ありません。私は性を郭、名を嘉、字を奉孝、真名を稟と申します。この度は本当にありがとうございました」

「オレは性を黄、名を恩、字を子苑、真名を璃人と言います。後皆

さん敬語みたいな口調はいいですよ。オレの方が年下みたいですよ」

「こちらにまで真名を許して良かったのか？それと、お主歳は幾つだ？」

「真名を許されたのに、返さないと礼儀に反しますし構いません。それと、歳は14です。あと少しで15になりますね。元服を迎えます」

「14！？お主その年でもう一人で旅してるのか？親は？」

「いますよ。父は病気で無くなりましたが、母が健在です。それに、14と言ってもあと1年で元服ですよ、そうなれば立派な大人です。オレは人より少し早く旅に出ただけです」

「ちなみにお兄さんはいつから旅に出てるのですか？」

「12の時ですね。大陸料理修業の旅です」

「「12！？」」星と稟が驚いたような顔をしながら繰り返す。風は声は上げなかったが、珍しく驚いた顔をした

「まあ基本平和な所を探してましたし、賊に見つかっても逃げ回っていたので大丈夫でした。おかげで逃げるのには自信がありますよ」とのん気な感じで言うてはいるが3人とも思う事があるのか、それ以上は聞かなかつた。本人は料理修行と言っではいるが、明らかにそんな感じはない。聞かれたくないのだろうと察した3人は話

を変えることにした

「なかなかな人生を歩んでいるようだ。それじゃ、璃人、お主はこれからどこへ行くのだ？」

「ん〜とりあえず、陳留で料理人でもしようかなと思っていました。あそこは治安が良いって評判なので」

「私と稟ちゃんもいずれは行くこうと思ってます〜。曹操さんに仕えるのが稟ちゃんの夢でもありますし」

「風、私はそんなただ曹操様にお仕え出来たら良いなと思ってるだけで、そ、それ以上の事なんて・・・ああ、いけません！そこは、あ、あ、いやん」何か一人で妄想に入った

「璃人そつちにいるのは危ないからこつちに来た方が良い。それに子供には毒だ」

「?」良くはわからないが、こういう時は言われた通りにするのが正解な事を経験から知っているので素直に星の横に移動する。稟は妄想に拍車がかかり一人で自分の体を抱きしめながら悶えている。すると、いきなり顔を上に向け

「ブハア！」鼻血を噴出した。しかもかなりの勢いである

「...」あまりの事に言葉が出ない

「はい、稟ちゃん、トントンしましようね。ト〜ン、ト〜ン」風が手慣れた手つきで稟を介護している

「稟は妄想が高まるとああやって鼻血を出す癖があつてな」

「一番まともな人だと思っていたのに…」

「ん？それはどういう事だ、まるで私や風がまともではないような発言だな」

「メンマで気絶する人なんていませんし、人形を頭にさせてる人も普通いません」

「クツ、あれはお主のメンマがあまりにも美味しすぎてだな」

「褒めてくれるのは嬉しいですけど、気絶するほどまでではないと思うんですよ。それを踏まえて、常識人は稟さんだけだと思いますけど、残念です。」がつくりと肩を落として見せる璃人。それを見て星がまだ抗議しよとする。途中からメンマの話になっていると言うわけのわからない展開、鼻血で倒れた人と頭に人形を乗せた人、そしてメンマについて熱く語る人。なんとも奇妙な光景が村の一角には有った。

.....

あのカオスの状況から場が落ち着き、今はそれぞれ出立の準備をす

る。

「それじゃ、ここで、お別れですね。お互い生きてればまた会えるでしょうけど、その時はよろしくお願いします。お気をつけて」

「うむ、達者でな。父以外に私の真名を預けた男がそう簡単に死ぬとは思えんが気をつけるのだぞ」

「なんか、サラツと言ってますが、ホントに良いんですか？オレなんかん真名を預けちゃって」

「それは、問題ない。お主は私が今まで見てきた男の中では素晴らしいと思うぞ。若干臆病な所があるが、やる時はやるという所は好感が持てる。もう少し年が経てば婿にしたいくらいだ」

「星さん程の人がお嫁さんなら嬉しそうですけど、オレには勿体ないと思うので他の人を探してください。星さんなら引く手数多でしょうから」

「む？私は結構本気だぞ？嫁になっても良いと思えたのはお主が初めてだ。」若干挑発的な顔で言っているがその真意がわからないのでここは流す事にする

「まあ、お互い生きて会えたら考えましょう。まだオレはお子ちゃまなんで、年上の星さんの魅力はまだ伝わらないですよ」実際美人だと思つ。けど、今まで会ってきた人も美人さんばかりでよくわからない。この世界ではこれが普通なのだろうか？と思ってしまうくらいである。性格的には合いそうな気がしなくもないが

「おうおう、他の女たちがいる前でイチャつくなんて、おめえやるじゃね〜か」

「こらこら、宝？、お二人の邪魔をしてはいけませんよ。この後御二人は人には言えないような、あ〜んな事や、こ〜んな事をするのですから」

「あんな事やこんな事？・・・プッシュウウウ！！」稟が妄想で鼻血を飛ばした。死因はおそらく出血によるものだろう。将来それが原因で死ぬ気がする

「全く稟ちゃんは妄想が逞しいですね〜。ほら、ト〜ン、ト〜ン自分で妄想させといてなかなかひどい」

「それじゃ、お元気で」

「うむ、また会おう！」璃人は完全に二人を無視して別れて、その後星が稟を背負い別の道に歩いて行った。

## 第8話 オレもしかして

星さん達と別れて今は陳留に向かっている。此処でのんびり料理でもやって暮らせればいいかなと思っただけ

「兄ちゃん、金目の物を置いてきな」後ろから声をかけられた。今日はよく賊に会うなと思いつながら後ろを振り返ると

「あれ？」

「！？お、おめえは……」先程襲って来た賊がいた。チビとデブもいたがこちらを見た瞬間固まっている

「それで、またやりますか？」

「へっへへ……あばよ」余裕の笑みを見せたかと思っただら部下二人を置いて逃げた。あ、あのオレと似てるなと思ってしまった。部下の方も、待つてくたさい兄貴とてか言つて追いかけて行く。チビの方はまだ良いがデブの方は辛そうだ。ダイエツトしとけよ。

それで振り返つて、陳留を目指そうとすると前の方から砂塵が見える。明らかに馬に乗った軍隊がこちらに向かつて来たようだ。絶対にこのまま此処にいたら問題になるので脱兎のごとく逃げ出し近くの森の中に逃げ込んだ。山での生活はもう慣れたので、これで逃げ切れる。ほとぼりが冷めてから陳留に向かえば良いだろう。

・  
・  
・  
軍隊が通り抜けるような音がしたのでこれで陳留を目指せる。でも、その前にのどが渴いたので近くの川で水を飲む事にする。これだけでかい山の中なら川くらい見つかるだろう

・  
・  
・  
見つけた。水の音が聞こえたのでそれを頼りに探すと意外と簡単に見つかった。…で水分を補給。手で掬ってのどを潤す…うまい。もう一杯…飲もうとした時、手の中の水が濁っている事に気づき、泥でも混ぜちゃったかな?と思い、いったん捨てて綺麗な所を探そうとして辺りを見ると赤く濁っている…これ血じゃね?

・  
・  
・  
オレ血飲んじやった?  
…

「おええええ」口の中のものすべて吐き出す。まさか自分が飲んだ水に血が入っているとは思わなかった。

「クソっ、一体誰だよ!川の中に血なんて流してるやつは!おかげで飲んじやったかもしれないだろ!いや、でもさっき飲んだ時は血の味はしなかったから大丈夫なはず!でも…。ああもう!どこのどいつだ!」血の流れて来た方を見て相手が怖くなさそうなら、文句言ってやるうと思いい川を上流の方に向かっていくと

一人の女性が賊に襲われていた。しかも、襲っている者の中には、先程逃げに行ったやつがいる。あの女性が斬り殺した賊の血が流れしてきたのか……鬱だ。

完全に落ち込んでしまいなんかどうでも良くなってしまった。最初は飲んでないと思いつつもとしてけど、何か飲んでしまったような気がしてきた。そう思うと胃の中がかなり悪くなる。やべえ…吐きそう

窮地に追い込まれている女性をしり目に、一人落ち込んでいる璃人。そんな璃人に気づいた賊が向かってくる。

「兄貴！さっきのやつですぜ！この人数なら今度は勝てますぜ！」  
チビが兄貴と呼ばれる髭に言う。

「バカ野郎！オレ達、新人を手伝ってくれるわけねえだろ！まずは、あの女を生け捕って、お零れに預かるんだよ。あの野郎の事はとりあえずほっとけ！」先程の様子から大した賊ではないと思っていたが、どうやら新人だったようだ。璃人の無駄に良い聴覚はその会話を捕えてしまった。だが今はどうでもいい。いま重要なのは、人の血を飲んだのか、飲まなかったのか、その点に尽きる。他はどうでもいい。

まず考える…

血の味はしなかった、それに最初に川を見た時は赤くなっていなかったはず。二杯目に移ろうとした時に気づいた訳だが、この間もの数秒。川の流れから判断して一瞬で染まるほどの速さではない。考えられる結論は二つ。

一つ、すでに川に血が流れていたが、まだ璃人のもとには届いておらず、一杯目を汲んだ時にはまだ大丈夫だった。

二つ目、最初から血が流れていた事に気づかなかった。

……… ……いくらなんでもこれはないだろう。普通気づく、だから大丈夫！

「そうだよ、オレは飲んでない！」

「その少年、良ければ助太刀願えないだろうか？弓を持っていると言う事は、武があると見える。今の状況では少々きついため、手を貸してくれないか？私がやられたら次は君だぞ？」なんか近くで声が聞こえる

・  
・  
・  
辺りを見渡すと賊に囲まれていた。そして話しかけてきた女性は先程襲われていた女性。こちらが考え事をしている間に、近付いてきたらしい。そのせいでこっちまで賊に囲まれているわけだが……

「あなたの所為で、オレは最悪の気分になったんですけど、この行き場のない気持ち、晴らさせてもらえますか？」

「?・・・何の事だかわからないが、ここを無事に抜ければ、私にできる事なら善処しよう。少年、何人ならいける?」

「約束ですよ。オレは速射がそこまで早くないので、近場の人は任せます。それ以外を受け持ちますんで」

「了解した。私はここの奴らを片付けよう」弓を置き剣を構える青髪さん

「任せましたよ?オレが死んだら、あなたの所為です」  
「そちらこそ、ぬかるなよ少年。私の命はお前に懸かっているからな?」

璃人が弓を番え、青髪の女性が斬りかかった。

-----

青髪サイド

私は、今賊に襲われている。最初は華琳様や姉者と賊の討伐に出たのだが、先に逃げられてしまい、空振りに終わった。その後陳留に帰還する事になったが、どうせ、外に出たのなら弓の鍛錬でもしようと思いい山で狩りをする華琳様に言っって許可をもらった。姉者も同行したがっていたが、姉者いると、騒がしくて動物達が逃げてしまつので、色々言っって誤魔化した。自分が褒められて嬉しそうにする姉者はやはり可愛い。

山の中で猪などを探していたが、見つからず、休憩がてら近くに有った川に行く。そこでしばらく休んでいたのだが、物音がした。辺りに気を配ると、人の気配。しかも、かなりの数。賊か？

やはり相手は賊だったようで、こちらを見るなり、気持ち悪い目で見回してくる。こんな奴らに見られるのは耐えられないので、先頭にいたやつに矢を放ち殺す。その光景に怒った賊たちが一斉に襲いかかってきた。最初は矢で応戦していたが矢が心もなくなってきたので剣に変える。迫ってくる賊を切り殺し、次の動作に備える。斬り殺した賊が川に突っ込んで川を汚してしまったが、今は気にしない。

賊の数は一向に減らず、手をこまねいていると、少し先に少年を見つけた。これはまずい。近くの村人が遊びにでも来ていたのだろうか？しかし、この状況ではあの少年が見つかれば殺されてしまう。私の手の届く所に置かなくては

とりあえず、少年のもとに来たが何やら考えているらしく、こちらに気づかない。しかし、嬉しい誤算があった。ただの村人だと思っていた少年は弓を持っている。それもかなりのものだ。見た感じはパツとしないが、それでもそれなりの武を持っているだろう。ここは少年に助力を願う

「そうだよ、オレは飲んでない！」

「その少年、良ければ助太刀願えないだろうか？弓を持っていると言ふ事は、武があると見える。今の状況では少々きついため、手

を貸してくれないか？私がやられたら次は君だぞ？」何か変な事を口走っていたが、気にせず頼んでみた。しかし、帰ってきた返事は予想外だった

「 あなたのせい、オレは最悪の気分になったんですけど、この行き場のない気持ち、晴らさせてもらえますか？」

「？・・・何の事だかわからないが、ここを無事に抜ければ、私にできる事なら善処しよう。少年、何人ならいける？」私が一体何をしたのだろうか？此処に賊を引き連れてきた事か？しかし、少年はそれよりも前から考え事をしていたはず、ならそれではない。一体・・・でもそれは置いておいて少年には後で償うとして今は此処を切り抜けるのが先決。少年にどれくらい大丈夫か聞いてみると、意外にも周りの敵は任せると言ってきた。

容姿からは想像できないが、なぜか不思議と安心感がある。なら、この少年に懸けてみようと思う。自分が死んだら私の所為？フ、それはお互い様だ。私が死んだら少年の所為だからな？。まだよくも知りもしない少年に背中を預けて賊に斬りかかりに行った。姉者や華琳様が聞いたら怒るだろうか？

- - - - -

青髪さんが前衛で戦っている間に、オレは賊を射殺す。青髪さんは星さん程強くはないが、冷静で自分の周りを常に警戒しながら戦っている。自分が射線上に入らないように注意し、それで尚且つ相手の数を削り、オレの所まで近付けさせない。この人と将棋勝負した

ら面白そうだな」

青髪さんの頑張りがあつてほぼ賊が全滅した（6割ぐらいは璃人が倒したのだが、本人にその自覚なし）。残った数人の賊はちりじりなつて逃げた。逃げるくらいなら、襲つてくるなよ！ビックリするじゃないか！

「少年、今回は世話になつたな。いや、命の恩人に少年とは失礼だな。私は性を夏候、名を淵、字を妙才という。良ければ貴殿の名前を教えてはくれないだろうか？」

なんと礼儀正しい人だろうか、これで、先程の事件がなければかなり好感が持てたのに……

「性を黄、名を恩、字を子苑と言います。恩人云々はお互い様なので、気にしないでください。こちらこそ、助かりました。それと敬語は結構です」

「いや。元々、こちらが巻き込んでしまったようだからな、すまない。……そういえば私に何か言つてなかつたか？」

「ええ、その事なんですよ。その事さえなければ、あなたの事はすごく好感が持てたのですが……」

「良ければ話してくれないか？恩人を不快にさせてしまったのなら、謝りたい。」

「ええ、大したことではないんです。川で水をね、そう、水を飲むうとしていたんですよ。最初はきれいな水を飲んでたはずなんです。・・・が、二杯目を飲もうとした時、その水が濁っている事に気づいたんです。何で濁っていたと思いますか？・・・答えは、人の血です。あなたが斬り飛ばした賊の。」

「それは・・・すまない事をした。あの時はそこまで考えが回らなかったからな。」

「別にあなたが悪いわけではないんですけど、この行き場のない気持ちはどうしたらいいでしょうか？一応自分では飲んでないはずなんです。」

「・・・侘びと言う程ではないが、口直しに「飲んでいません」・・・命を助けてくれたお礼に料理を振る舞おうと思うのだが、どうだろうか？一応、主からも認められている腕前だ。不味くはないと思うのだが」こちらの事情を察してくれるあたり、本当に良い人である。

「主と言うと、あなたはどこかのお城に仕えている武将さんですか？」

「陳留の勅史である曹操様に仕えている」

「ああ、ここら辺では評判がいいですよ。でも、城に行くのはちよつと・・・」

「ん？何か気になる事でもあるのか？華琳様は素晴らしいお方だから心配する必要はないぞ」

「曹操さんって女性の方なんですか。城はなんか危ない感じがするじゃないですか。ほら、お偉いさんとかに無礼を働いて死刑とか言われたら嫌なんですけど。というより夏侯淵さんもお偉いさんですよね？主の真名を受け取るくらいには。オレって罪になります？そうなたら全力で逃げますけど…」

「フフ、先程戦っていた男とは同じ男に思えんな。大丈夫だ私はそんなことしないし、華琳様もそんな事は許さない……と思う」

「最後のがすごく心配なんですけど…」

「華琳様は気分屋なところがあるから、イライラしてる時に無礼を働いた者がいたら。だが、今は大丈夫なはずだ」死んじゃうんですか！？無礼を働いたらやっぱ死んじゃうんですか！？

「今回は巡り合わせが悪かったと言う事でお礼の件はなかった事にしてもらいたいです。というか勘弁してください。まだ死にたくないです！」自分の首が飛ぶ姿が想像できてしまい、もう逃げの一手しかないと悟る璃人

「本当に先ほどとは別人だな。大丈夫だ、私の客人扱いなら華琳様も酷くは扱わないだろう。それに恩人に何もせずに戻したら私の方が叱られてしまうからな、私の顔を立ててはくれないだろうか？」

「いつそ、誰とも会わなかったというのはどうでしょう？」

「私に嘘をつけと言うのか？それはできん相談だな。華琳様に嘘を

つくなどありえん話だ」自信たっぷりと言つそれくらい曹操つて人を崇拜しているのだらう。

「なら仕方ないですね。ご相伴に預からせていただきます。でも、何か不審な気配を感じたら速攻で逃げますんで。あとこの弓は大事な物なので持っていていいですか？いったん預かるなんて言われなくても嫌なんですけど」

「まあ、そこは城についてから、華琳様に頼んでみよう、大丈夫なはずだ。ただ、矢の方は預からせてもらうぞ？」

「そちらは別に構いません」

「では、行こうか」青髪さん（心の中ではこう呼んでいる）について行き城を目指す。でも　あなた馬有ったんですね？オレは歩きですよ、この野郎！トボトボと馬の後ろをついて行った。ポニーテイル（馬だけに）が揺れているのがなんかムカついた。

.....

### 陳留到着

この町は随分と活気に満ちている。治安の良い証拠だらう。オレは青髪さんの後に続いて城の方を目指す。途中青髪さんに話しかけてくる町民がいたが、青髪さんが此処の人達に慕われている事がよくわかる。

城の入口で待機。今青髪さんが曹操さんに聞きに行っている。門番の人と少し談笑しながら、青髪さんの帰りを待つ

「許可が下りた。行くぞ、子苑」随分と早い到着で。それと青髪さんはオレの事を子苑と呼ぶ。何か黄恩とは呼び辛いらしい

城の中を青髪さんの後ろについて歩く。キョロキョロしながら歩いていたので青髪さんに怒られた。シャキツとしてるだとき。何か城にいると落ち着かない。昔から周りの目を気にしていたから、すぐに視線を追ってしまう。これは姫さんの所でもそうだったが、慣れないもんだ。やっぱ、森の中が一番良い

・  
・  
・

王座の様な所に到着

「秋蘭です。華琳様宜しいでしょうか？」

「入りなさい」許可が下りたようだ

「くれぐれも失礼のないようにな。」

「もちろんです。いざとなったら全力で逃げてやります！」

「ハア〜そんなこと高らかに宣言しなくていい。何もしなければ大丈夫だ」

青髪さんが部屋に入り、続いて部屋に入る。姫さんの所よりは小さいが十分な大きさの広間だった。前方を見ると、金髪の女性と、黒髪の女性がいた。なんか、黒髪の女性に関してはこちらを睨んでい

るような気がするんですけど 逃げよう

「待て、逃げるな。それと姉者あまり睨まないでやってくれ、こいつは見ての通り少し臆病なんだ」逃げようとして瞬間、青髪さんに肩を掴まれ防がれる。しかも、黒髪の女性は青髪さんのお姉さんらしい。姉？どちらかというと、青髪さんの方が姉のような気がするけど…

「お前考えている事が顔に出てるぞ。れっきとした姉だからな。私の方が妹だ」

「失敬。」

「で、あそこに居られるのが我らが主曹操様だ。しっかりと挨拶しろよ」

「はい。」金髪さんにの近くまで行って抱拳礼の形を取る

「お初にお目にかかります。性を黄、名を恩、字を子苑と申します。この度は夏候淵殿のお招きにあずかり、参上しました。どうぞ、よろしく願います」

「我が名は曹操。私の部下を救ってくれたようね。礼を言うわ。秋蘭には礼をさせるから、今日は此処に泊って行きなさい。」

「ありがとうございます。」礼をして、すぐに青髪さんの後ろに行く。金髪さんよりも黒髪さんの殺気がヤバイ

「春蘭やめなさい。秋蘭の命の恩人なのよ」

「そつだぞ、姉者」

「で、でも、華琳様、この男が秋蘭を助けたとは到底思えません。黒髪さんが縋るような目で曹操さんを見る。何か変な空気」

「確かにそうね。でも秋蘭が私に嘘をつくわけないし、そんな意味もない。そうでしょ、秋蘭？」

「は！」

「弓の使い手らしいわね。黄恩とやら、試しに腕を見せてもらえないかしら？」

やはりそう言う空気か。なんとか誤魔化さなければ…

「ええ、大変申し上げにくいのですが、私は狩り専門の弓使いなので、期待に応えるような腕は持ってはおりません。今回は夏侯淵さんが、近場の敵を相手してくれたので、その隙について狙っただけです。相手が動いてないなら当てられますが、動いていたら無理です」実際動いていようがいまいが賊相手なら関係ないのだが、ここで下手に本当の事を言うと面倒な事に絶対になる。かと言って全部ウソをついても青髪さんにバレる為、本当の様な嘘を話す

「でも、それじゃ、狩りなんてできないでしょ。止まっている動物の方が少ないわ」そう来たか、なんてもっともな意見、しかし言い訳などすでに考えてある

「それは、動物が他の所に注意が向いてる時に狙うんです。餌を捕っている熊なんかは狙い目ですね。矢を当てるのが難しいのは、対

象が動いてるからではなく、その動きが読めないからです。だから、相手の動きが制限されると頃を狙えば良い。例えば死んだ動物の肉や、予め買っておいた肉を置いておき、そこに群がった所を狙うんです。小さな餌で大物を釣る。人類の英知のおかげですね。」実際は、そんな事はしない。絶で気配を経って射程距離まで近づいたら、後は射るだけ。

「人類の英知ね、面白い事を言うじゃない。気に入ったわ、秋蘭食事の用意を。私も黄恩と食べるわ。」

「「え!?!」驚いたのはオレと黒髪さん

「わかりました。すぐに用意して参ります」そう言っつて爽快に去っていく青髪さん。

「……ちよつと待って!この場にオレ一人とか、何の虐めですか?むしろオレも厨房に行きたいツス!置いて行かないでください!カムバア!ツク青髪さん!オレを一人にしないで

「行つてしまつた」

「そんなに秋蘭にいて欲しかったの?なら呼びもどしてあげても良いけど、それだと料理が食べれないわよ?」

「何〜、貴様!まさか秋蘭のことを……」剣を抜いて近づいてくる黒髪さん

「ちよつと!何で剣を抜くんですか!?オレはただ、常識的な人が一人いなくなつた事に……」

「何々貴様！それは華琳様が非常識だと言いたいのか！」

「いや、むしろあなたです。というか、自分が非常識の中に入っていない事の方がビックリです」

「何を々々「春蘭」は、はい華琳様！」即座に曹操さんの声に反応する黒髪さん

「あなたは、私のどこが非常識だと思っているのかしら？」

「そ、そんな事は思っておりません。こ、こやつが…」

「異議あり！私は一人いなくなったと言っただけで、だれも、曹操さんを非常識なんて言っけません！」この黒髪さん勝手に罪をなすり付けようとしゃがった。そうはいかんぜよ！

「黄恩はこのように言っているけど、あなたは私が非常識だと思っただ訳よね々。さっ言っ御覧なさいな、あなたは一体私のどこが非常識だと言っのかしら？」どどん怒気を上げて行く曹操さん

「うっうっうっ」

「春蘭？」

「閨の時の攻め方とか？」ああ、それは悪手だ々。しかも、曹操さん百合なんですか？驚愕の事実が発覚した。全然知りたくなかったけど

「そう　春蘭、これから暫くの間、私との閨を禁止するわ！しばらく一人で慰めていなさい」

「そ、そんな、か、華琳様」何か泣き絶っている黒髪さん

「春蘭、私の言う事が聞けないの？」黒髪さんの顎に手を当てながら聞いている。何か後ろに百合の絵が見えるのは気のせいだろうか？具現化系か？

「い、いえ。」少し落ち込む黒髪さんだが、なんか嬉しそうである

「フフフ、良い子ね。ちゃんと反省したらまた呼んであげるわ」その言葉に嬉しそうな顔を浮かべる黒髪さん。なんか従順な犬のようだ

「は、はい！華琳様！」

そんなやり取りを二人で展開してオレとしてはすごく居心地が悪いのだった。

## 第9話 一体なぜこんな目に？

マジで居心地の悪いこの空間で待たされるなんてかなり辛いッス。いつそのこと手伝いに行つてきますとでも言えば良いだろうか？でもそれをする、黒髪さんが怒りだしそうな気がするんだよね〜

曹操さんはなんかこつち見てるし、なんとか視線を合わせないようになっているけど、話しかけられたらどうしよう。おお神よ、私を救いたもう。

「黄恩、あなたはなぜこちらを見ないのかしら？」もう神なんて信じねえ！願ったそばからこれかよ！

「ええっと、人見知りする方なので、人と目を合わすのが苦手なんです。」一応曹操さんの方を向く

「ふうん、その割には秋蘭と話せていたようだけど…」

「まあ、あの人は話しやすかったですし。」

「それは、私とは話辛いと言う事かしら？」若干の怒気が見える

「ええ、今もそうですけど、曹操さんと話すと黒髪さんが殺気を飛ばしてくるので」

「春蘭やめなさい。…それにしても春蘭の殺気を浴びて随分と平然としてるのね？家の兵士だって辛いはずなのに」なんか嬉しそうな顔をしている

「いや、実はかなり怖くてこれ以上は進めないんですよ。かなり、手加減してくれているようですが、それでも、オレには一杯一杯です。顔に出にくいのは気の性です。膝が震えまくっています」

「あなた本当に秋蘭を助けたの？」 呆れた顔をしてみてる曹操さん

「だから先程も言いましたように、夏侯淵さんがいたから何とかなつただけで、オレ一人じゃどうにもならなかつたですよ。夏侯淵さん様々ですね。」

「そうだろ、そうだろ、秋蘭はすごいやつだからな。うん、お前わかつているじゃないか」 黒髪さんが言う

「そうですよね？だから、そんな人に料理を作らせるなんていけないと思います。しかし、ここで断るのは夏侯淵さんに悪い。なので、オレも手伝って来て良いですか？一応旅してきたから、それなりに料理はできますし」

「おお、良いぞ。だが、秋蘭に迷惑を掛けるなよ。」 ちよろい、ゴン以上にちよろいな。これで、堂々とこの部屋から出る事が出来る。では、と言って去ろうとするが

「待ちなさい」 曹操さんに引き留められる。やはり、黒髪さんを避けてもこの人は無理だったか！

「なかなかの話の持つて行き方だわ。秋蘭を褒めれば春蘭が乗ってくるがわかつていたようね。私との会話から春蘭に相手を変えるの

も自然な流れだったし。…それで、あなたはどうしてここから出て行きたいのかしら？」バレてる！

「当然ね。部屋の中をキョロキョロ見ていたし、こちらを見ようともしない。さっとうして出て行きたいか言って御覧なさい」人の心が読めるのか？…ここは正直に言うべきか？下手な事を言っ  
て疑われてもあれだし…

「いや〜ココすごく居づらいですよ。お二人が仲のいいのはわかったのですが、子供のオレには刺激が強すぎるので、出て行きたいな〜と思っただけです」

「…ふ〜ん、まあいいわ。でも、あなたがここから出るのはダメよ。折角秋蘭が料理をしてくれているのだから、それを邪魔するのは無粋じゃなくて？」

「それもそうですね、では待たせていただきます。しかし、お二人の邪魔をするのも忍びないので端の方にいますね。」

若干疑われたようだが、青髪さんへの信頼度のおかげか、なんとかやり過ごせた。端に移動もできたし、いざとなったら、ここから逃げ出せる。

あの二人を見てもあれなので念の修業でもするか。念の方は出来ないが燃の方ならできる。とりあえず、点でもやってみよう。

腰を落ち着けて、胡坐をかき瞑想する。最初は周りの音が聞こえているが、だんだんと音が消えて行く。聞こえるのは自分の呼吸と心臓の鼓動。この状態にまで行くとすごく集中できる。…zzzz

「黄恩、起きなさい」

「・・・は！」いつの間にか寝てしまったようだ。しかし、それほど時間が経っているわけではないだろう。

「座禅をしたかと思っただら寝てるなんてね」「ちょっと呆れている

「今日は色々あって疲れていたんですよ。ハハ」

「まあ良いわ。秋蘭の準備ができたから行くわよ。早くしないと折角の料理が冷めてしまうわ」

そうですね、と言って食堂に向かう。黒髪さんはかなりテンションを上げ、曹操さんはそんな黒髪さんを楽しそうに見ている。一人八つられた感はあるが、ここは仕方がない。早く行って食べてしまい、今日中にここを出よう。お金はあるのだから、宿くらい見つかるだろう。

食堂に到着

「夏侯淵さん、今回はありがとうございます。ご相伴に預らせていただきます。」

「そんな堅苦しくする必要はないぞ子苑。」

「いえ、曹操さん達がいるのに緊張しない方が無理ですよ。」

「それは私が邪魔と言う事かしら？」

「いえ、そんな事はないですけど。ほら、一介の庶民に城主様とお食事なんて普通ありえないじゃないですか。だから、緊張しちゃうんですよ。だからと言って出てけと言っているわけじゃありませんからね。ただ、言葉数が少なくなるかもしれないし、緊張して味がわからなくなっちゃうかもしれないので、その点はご了承ください」

そうね、それは仕方ないわと言って向かい側の席に座った。黒髪さんはその隣。夏侯淵さんはオレの隣に座る。女性3人に男一人、この世界に来て結構こういふ場面も増えたけど、やっぱり慣れない。

「では、頂きましょうか」

「頂きます」手を合わせて食べようとすると、なぜか、視線がこちらを向く。

「え〜っと、やっぱり曹操さんが食べるのを待った方が良いですか？すみません、常識がないもので」

「いえ、そうではないわ。その手を合わせて頂きますとはどういう意味なの？」ああ、この人にはない習慣か。そう言えば、どこ行っても聞かれたっけ

「ええっと、食材となった動物に対しての感謝の言葉です。食材である生き物の植物や動物の命を絶ち調理し、それらの命をもらってそれを食べる人間が自分の命を維持し生存することの感謝を表すために言う言葉と故郷で教わりました」

「そう、良い習慣ね。それじゃ頂きます」「」「頂きます」「」

他の人たちも、オレの真似をして頂きますをした。

皆が一斉に食べ始める。特に黒髪さんの食欲は半端じゃない。またたく間に、料理が無くなっていく。あれ〜これって一応オレのためじゃなかったけ？横目で青髪さんを見るがスマンと言ってているような顔をされた。まあ結構量もあるし、それを見越して作ったのだろう。

味の方は…うん、なかなかうまい。メンチとかに比べればまだまだだが、下手なお店で食べるよりはずっとうまい。惜しい所と言えばちよっとコツテリした物が多いと言う所。この世界で不思議に思っていたのだが、どうしてこんなに高カロリーの物を食べて、太らないのだろうかと疑問に思えて仕方がない。

「ごちそうさまでした」

「それもあなたの故郷の習慣？」

「はい。これは、料理を作ってくれた人や食材を調達してくれた人に感謝を表す言葉です。」

「そう…ごちそうさまでした」曹操さんに続いて二人も言う。

「夏侯淵さんは、この場合作った人ですから、お粗末さまでしたと言えは良いんですよ」夏侯淵さんは言われた通りに言う。そこし、疑問に思ったようだがまあ良いだろう

その後片づけは手伝い、一休みする。此処を出ようとしたが、曹操さんに阻止され、部屋を与えられて今はそこで横になっている。明日には出て行けるだろうと考え、寝ようとする、ドアの外から声をかけられた。この世界にノックと言う言葉はないらしい。家の実家では割と浸透しているんだけど…

「はい、どうぞ。」ドアを開けて入ってきたのは曹操さんと青髪さんでした。

「何かご用ですか？」

「用というわけではないのだけど、あなた内に仕官しないかしら？まさかのお誘い」

「武官ではないので遠慮させてもらいます。それにまだ旅を続けま

「そう、まあ今はいいわ。それと武官ではないと言っていたけど、あなたは一体何をしているの？」

「料理人ですね。それで今は修業中です。」

「・・・あなたが料理人ね、面白そうだから、明日何か作ってくれないかしら？勿論材料はこちらで出すわ。」

「明日ここを出るはずなんですけど…」

「良いじゃない。その後出ても遅くはないわよ。」

「修業中の身なので、美味しくないかもしれませんが、それで、何

か罰とか有ったら嫌なんですけど…」

「そんな事はしないわ。私はただ、あなたの料理を食べてみたいだけ」

「・・・わかりました。それでは、曹操さんと、夏侯淵さんと黒髪さんの好きな食べ物と嫌いな食べ物を教えてください。」

「そういえば、なぜお前は姉者のことを黒髪と呼ぶのだ？」実はあなたの事も黒髪さんと呼んでいるとは言えない。

「だって、名前知らないですから。自己紹介をしてくれたのは、曹操さんと夏侯淵さんだけですから。」

「そう言えばそうね、明日させるわ。・・・それで、私達の好みを教えて欲しいようだけど、料理人を目指すならそれくらいわからないといけないのではなくて？」なんか挑発的な笑みを浮かべているが、そんなのわかるわけない。そもそも、人の顔を見て料理する事の方が少ないだろう。しかも、あつちは好きな物を注文してくるのだから、こちらがそれを把握する必要はない。だけど、この人に言っても無駄だろうな」

「まあ、まだ未熟者です。それにここで見栄を張って嫌いな物を出しても、相手に失礼なので、教えてもらえませんか？曹操さんだつてわからない事が有ったら聞くでしょう？聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥って言いますし。」

「聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥…初めて聞いたけど、なかなかいい言葉ね。あなら結構博識なのね。本当に一庶民なのかしら？」

「父が昔文官の仕事をやってしまして、それなりに学んだだけですよ。故郷では割と皆知っている言葉です。」はい嘘。こんな言葉この国で知っている人はいない。だけど、こう言っておけば、まあ大丈夫だろう。

「興味深いわね。あなたどこの出身なのかしら？」

「益州です。まあ森や山ばっかで何も無い所ですよ」

「益州ね・・・あんま良いうわさは聞かないけど。確か、劉璋の配下の武將の敵顔と黄忠は有能だと聞くけど、劉璋自体はそうでもないとか。そう言えば、黄忠の性と同じね、これって偶然かしら？」  
「ニヤッと笑って聞いてくるが、別に話しても問題ないが、下手に武將の子供が他州にいるとなると問題になるかもしれないので、ここは黙っておく」

「性が同じだけです。意外とありふれた性なので偶然同じだったんじゃないですか？」顔には出さず、嘘をついて見せる

「まあそうね。もし黄忠の息子ならこんな所で旅をしているわけないものね。」

「ええ、全くその通りです。それで話を戻しませんか？皆さんの好みを・・・」

「悪かったわね。私や秋蘭は特に苦手な物はないわ。ただ、辛すぎるのは舌に悪いからあまり好きではないけど。春蘭は基本何でも食べるから平気よ」

「わかりました。明日は精一杯作らせて頂きます。」抱拳礼をして、

頭を下げる

「ええ、楽しみにしているわ。それと、秋蘭はまだ話が有るみたいだから、残して行くわね。では、黄恩お休みなさい」

「お休みなさい曹操さん」曹操さんが出て行って部屋では二人きりになった。すると、夏侯淵さんが徐にお酒を取り出す。

「オレお酒あんまり好きじゃないんですけど…」

「お前も良い歳だろ。酒くらい飲めないと大変だぞ。それに、料理にだって酒を使うし、店を開こうと思ったら酒だって必要になるだろう？飲めといた方が良いぞ」

「…わかりました。オレもそろそろ元服を迎えるので、大人への一歩として飲ませていただきます。」

「元服？お前歳は幾つだ？」

「今14で、もうすぐ15になります。」

「そうか、その年で旅をしているのか…すごいな」

「皆さんだって、オレと同じ頃には戦場を経験していたんでしょ？十分オレよりはすごいと思うんですけど…」

「確かにそうだが、私達は一人と言う事はなかったからな、その点で行けばお前は一人旅だ。立派なものだよ」

「なんか恥ずかしいですね、年上の人に褒められるのは…それじゃ  
元服のお祝いに一杯付き合ってもらえますか？」

「フフ、もともと私が誘ったんだがな、まあ良いだろう。ほら、酌  
してやるから湯呑みを出せ」

「何か美人さんに酌してもらうのは気分が良いですね。ああ、そ  
れくらいで結構です。あまり多すぎても飲めないのです。では、こち  
らも」青髪さんに注いでもらい、今度は注ぎ返す。それで、乾杯し  
て酒を飲む。…やっぱ、この世界の酒はうまくない。オレが作った  
方がまだマシだ

「なんだ、だらしないぞ、姉者なら樽を全部飲んでも足りんだろう  
な」

「…そう言えば良いんですか？いくら子供とは言え、夜中に男の部  
屋にいるなんてあの人に知れたら…」

「危ないだろうな…」

「ですよね」「お前が」…やっぱり？あの女確実にあなたの事、溺  
愛してますもんね。これ飲んだら、出て行ってもらえますか？ま  
だ死にたくないもので」璃人の顔はかなり真剣だ。目が本気だもの

「ホントにあの時とは別人だな。心配するな、姉者はもう寝ている。  
華琳様との閨を禁じられているから、すぐに寝てしまったぞ」

「最初に会った時から思っていましたけど、やっぱあの二人そっち系  
の人達なんですね。もしかして夏候淵さんも？」

「ん？まあそうだな。華琳様や姉者の事は好きだな。」3歩くらい下がる。

「おいおい、そんなに引くな。別に男に興味がないわけではない。ただ、近くに良い男がいなかったただけだ。華琳様もきっとそうだぞ。まあ姉者は」

「女にしか興味がないと」どうしよう、黒髪さんと会った時対応に困るな。女にしか興味のない人に出会った事はない

「ん〜というより、自分より強い男でないと認めないだろうな。」

「そんな人いるんですか？殺気からして尋常じゃない気がするんですけど…」あれはキルアが本気モードになった時くらいの殺気だ。やってみないとわからないが、今のオレだと念を使っても勝てないだろう。緋の目を使ってなんとかぐらいたろうな。この世界の人達はそれくらいおかしい。前の世界の腕力とこっちの世界の腕力はどうも合っていない気がする。星さんだってそこまで腕力が有るわけじゃなかったのに人を飛ばしていたし。さすがにキルア程じゃないだろうけど…」

「まあいないだろうな、今のところは。」

「世継ぎがいなくなりますよ」

「確かにそうだが、姉者に勝てる男がそうそう出てくるとは思えないのだが…。子苑試してみるか？」

「何バ力なこと言っているんですか！勝てるわけないでしょう。オレは料理人であって武官ではないんですから・・・」

「しかし、料理人と言うにはなかなかの弓の腕前だったぞ、私でも敵うかどうか」ちよつと含みのある顔をする青髪さん

「もう酔っぱらったんですか？オレが勝てるわけないじゃないですか。酔ったんなら部屋で寝た方が良いでしょうよ」

「これくらいで酔っているわけないじゃないか。」

「酔った人はみんなそう言うんです。ほら顔だって赤くなっていないですね」

「酔ってはいないからな。・・・そうだ、お前に私の真名を預けよう。お前は命の恩人だからな」

「随分と唐突ですね。本当に酔ってませんか？」

「ああ、酔って真名を預けることなどせんよ。私の真名は秋蘭と言う。今回は助かった。」秋蘭さんが頭を下げる。この人も結構律儀な人だ

「それはお互い様なのでいいですって言ったじゃないですか。それじゃ、オレも真名を預けます。オレの真名は璃人です。」

「うむ、確かに受け取った。それでは、私もそろそろ・・・」少しよるめく秋蘭さん。とつさに手を取って倒れるのを防ぐ。

「もうう、やっぱり酔ってたんじゃないですか。気をつけてください

い……殺気?!」扉の向こう側から殺気が

ドアが開くとそこに立っていたのは……鬼神。目の前にいる敵をすべて葬りそうなぐらいの殺気を放つ鬼がそこには立っていた。

「ええつと、これは……オレが説明すると大変そうなので、秋蘭さんお願いします」

「秋蘭 だと?き、貴様、秋蘭の真名を呼んだな……。それに、秋蘭を毒牙に掛けようとは……許さん!」

「待て姉者!これは誤解だ。私が酔った所を璃人が助けてくれたんだ。それに真名に関しては、私が預けたんだ、だから誤解するな」

「秋蘭は黙っている!その男がお前の夫に相応しくない事を私が証明してやる!」

「何その急展開!?誰が誰の夫になるんですか!?しかも黒髪さん寝てるって言うてたじゃないですか!秋蘭さん」

「ああ、確かに寝ていたが、私の大切な妹が部屋にいない事に気づいてな、探してみたら案の定だ。今まさに襲われようとしていたからな、探し回って正解だった。貴様覚悟はできているだろうな……」

「嘘!?この状況をどう見たらそんな事に!??」

「すまん、どうやら姉者は寝ぼけているらしい。」

「なんで寝ぼけてる人が、武器なんて持っているんですか！」

「それは姉者だからとしか」

「なんかすごい納得です！・・・しかし、この状況なんかかなりま  
せんか？」

「無理だな。私は問題ないだろうが、お前は・・・」

「何それ！助けてくださいよ！俺こんな所で死ぬのなんて御免です  
よ！」

「しかし・・・」

「うるさああああい！！！！」バン！と曹操さんが勢いよくドアを  
開けて入ってくる

「もう！何騒いでいるのよ！うるさくて眠れない…あら、どうした  
の春蘭、そんな所で寝て。」曹操さんが開けたドアによって春蘭さ  
んが気絶した。さすがのあの人でも不意打ちには勝てなかったらし  
い。

「ああ、助かった。曹操さんグツジョブ！」サムズアップして曹操  
さんに言う

「ぐっじよ ぶ？何よそれ。というより、この状況はどういうこと  
なの・・・秋蘭」

「は！実は」秋蘭さんが説明に入る

・  
・  
・  
「そう言う事ね。理解したわ」さすがは大将！これでオレの命は安泰だ

「つまり。秋蘭を賭けて春蘭と勝負がしたいと 黄恩あなたもなかなかやるじゃないの。惚れた女のために命を懸けるなんて。良いでしょう、秋蘭をそこらの男に渡す気はなかったけど、春蘭に勝てたら考えましょう」

全然わかってないよ！どこをどう解釈したら、そんな事になる訳！？オレがいつ惚れたなんて言った！

「華琳様いくらなんでもそれは 。 姉者に勝つなんて」

そこじゃないよ！まずは惚れた云々の所を否定してください！何戦う前提になっているんですか！しかも、良いんですか？自分が賭けの対象になつてますよ

「曹操さん、それはあまりにも・・・ほら秋蘭さんにも悪いですし」

「へえ、秋蘭の真名までもらったんだ。秋蘭もそこまで見込んでいるなんて、フフ、明日は楽しみね。それじゃ、私は寝るからまた明日。」爽快に去って行った曹操さん。うそ、撤回させてもらえないんですか？

「スマンな璃人。話がこじれてしまった。姉者には私から言うておくからな」

「そうですね、秋蘭さんが言えば「殺さないように」と「そこじゃないよ！まずは戦う事を止めさせてください！オレ庶民、あの人武官！おかしいでしょう！」倒れている黒髪さんを指さしながら言う

「無理だな。華琳様が決めてしまった以上後には引けない。諦めてくれ」肩にポンと手を置かれ、そう言われる

うそ・・だろ。そう立ちつくすオレの横を秋蘭さんが通り過ぎて行き黒髪さんを担いで部屋を出て行くのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5136y/>

---

真・恋姫無双                      二度目の人生も波瀾万丈

2011年11月29日00時39分発行